

ZENCOLO

ゼンコロ

2026.2

No.179



- (特集1)WAsia マニラ会議報告
- (特集2)フィリピンマニラ戦跡ツアー報告
- インド訪問、国際交流事業
- ゼンコロ版アビリンピック in 山形
- ゼンコロ版アビリンピック、DTP組版
- リーダー層職員研修会
- 北から南から
- JDF 能登支援活動に参加して
- なかまの声
- お薦めの本

一般社団法人 ゼンコロ
〒165-0023 東京都
中野区江原町 2-6-7
電話 03-3952-6166
発行 中村敏彦



WORKABILITY ASIA 2025マニラ会議 最終日・日本からの参加者 (2025年9月24日)(本文P 2~) (写真 WORKABILITY ASIA newsより)

特集①



WAsiaマニラ会議報告

国際交流

会長 中村 敏彦

はじめに

昨年9月22日～24日まで、フィリピンマニラで「職場におけるインクルージョン：視点の変革と機会の創出」をテーマに、WAsia（ワーカビリティ・アジア）会議2025が開催されました。

WAsiaには、バングラデシュ、香港、インド、日本、マカオ、マレーシア、ネパール、パキスタン、フィリピン、スリランカ、台湾、タイなど13の国と地域にまたがる50の加盟組織があります。マニラで開催された2025年の会議は、実行可能な解決策を促し、パートナーシップを促進し、アジア全土の労働力への障害者の参加をさらに推進するためのダイナミックなプラットフォームを構築することで、この遺産をさらに発展させることを目的としていると示されています。

ゼンコロは、WJ（ワーカビリティ・ジャパン）のメンバーとして参加していますが、本誌では、国際交流を特集し、私からはWAsiaのホームページも参照しながら国際機関や会議の概要などを紹介させて頂きます。

WI

（ワーカビリティ・インターナショナル）

WIは、1987年に設立され、障害者向けの就労・雇用サービス提供者を代表する世界最大の団体です。南北アメリカ、アジア、ヨーロッパ、オセアニアの70の加盟団体が提供する就労プログラムには、300万人以上の障害者が参加しています。

WAsia

（ワーカビリティ・アジア）

WAsiaは、WIの地域グループとして2004年に設立されました。仕事と雇用は、国連障害者権利条約で取り上げられている主要な課題の一つであり、働くことを通じて、障害者は生計を立て、高い自尊心を築き、地域社会への参加を促進します。国連アジア太平洋経済社会委員会の報告によると、アジア太平洋地域には約6億5千万人の障害者が暮らしています。この数は、人口の高齢化、自然災害、その他の要因により、今後数十年で増加すると予想されています。障害者の多くは貧困状態にあり、経済活動

への参加も限られています。仕事と雇用は、貧困を克服するための最良の手段のひとつです。WAsiaは、アジア太平洋地域の障害者の「権利を実現する」ための仁川（インチョン）戦略を推進することを目指しており、アジア諸国の障害者に就労機会を提供する団体のネットワークです。WAsiaのメンバーは、それぞれの国・地域において、障害者の就労権の確保と、就労機会の創出に尽力しています。

アジアで障害者の就労と雇用に取り組んできたサービス提供者や障害者団体は、国際組織であるWIに参加しました。WIは、その地域グループとして2004年にWAsiaを設立し、2008年に日本の札幌で開催されたWI年次総会は、WAsiaの出発点となりました。主要団体の関係者は、アジアにおける障害者雇用ネットワークの重要性を認識する絶好の機会となりました。

WAsiaの第1回会議は2006年に台湾の台北で開催され、2009年、フィリピンで開催された年次総会では新しい理事が選出されました。ネットワークをより現実的で持続可能なものにするために、その構造、会員、財務、活動について検討と議論を開始するために、年次会議および年次総会は、加盟団体の主催により、さまざまな国や

地域で開催されています。

このユニークな会議は、障害、仕事、雇用に関する最善の方法を共有するために、国内、地域、そして国際的な関係者を集める場となっています。会議には、雇用主ネットワーク、商工会議所、国連、国際NGO、地域CSO、NGO、OPD、そして政府からも参加者が集まります。会議では、国内報告書の提出と発表、そして最新の研究成果や研究成果に関する議論と討議が行われます。参加者は、障害のある方とない方、学界、非営利団体、政府機関、企業から集まっています。

WI (ワーカビリティ・ジャパン)

WIも同様の目的で2004年に設立され、現在、全国社会就労センター協議会、NPO法人日本セルフプレンター、きょうされん、ゼンコロの4団体が所属しており、WAsiaにはアジアの仲間として加盟し、交流を深めています。WIには、近年のWIの活動が停滞気味であることを理由に退会していますが、WAsiaの会議には、日本からも積極的に参加しており、国際的な障害者就労支援策の動向を学び、日本の現状も発信するなど、貴重な経験交流の場となっています。アジアや日本の障害のある人の就労支援策の発



展に貢献することは、私たちゼンコロの重要な役割と考えています。

WAsia 会議

WAsia 会議は、障害者の生活につながる協力と機会の開発、および障害者部門の友愛の強化のためのユニークな機会を創出します。

3日間にわたる会議では、実務家、政府機関、非政府組織による全体会議、障害、商業、政府、学術セクターからの講演者が登壇します。その内1日は、開催国における障害者の雇用と技能育成に取り組む団体への視察に充てられています。

今回の会議の主な焦点は、次のとお



りです。

① 視点の変革

○ 固定観念に挑戦する…障害者の能力に関する偏見や誤解を打ち破るために、雇用主、同僚、一般の人々を教育します。

○ 組織文化の変化…障害よりも能力を重視する包括的な価値観を企業に採用するよう奨励します。

○ 支持者に力を与える…変化を推進する上での同盟者、障害者リーダー、障害者団体の役割を強調します。

② 機会の創出

○ 雇用経路…障害者のスキルと願望に合わせた研修、採用、キャリア開発プログラムを拡大します。

○ 起業家精神…メンターシップ、資金提供、リソースを通じて、障害者の自営業と事業所有を促進します。

○ アクセシブルな職場…障害者が完全かつ平等に労働力に参加できるようにするテクノロジー、政策、インフラストラクチャを導入します。

③ コラボレーションとイノベーション
○ マルチセクターパートナーシップ…政府、企業、NGO、障害擁護者を結集して持続可能な解決策を開発します。

○ テクノロジーの活用…支援ツールとデジタルイノベーションを活用して、障害者のアクセシビリティと生産性を向上させます。

○ 政策提言…インクルーシブな雇用慣行と職場の公平性を促進する法律や規制を強化します。

全体的な目標

今回のテーマは、障害者を主流の雇用に統合するための実践的な解決策を提供しながら、理解と協力を促進することで、実行可能な変化を促すことを目指しています。これは、インクルーシブな職場の経済的および社会的利点を強調し、イノベーションと成功を推進する多様な人材の変革の可能性を強調しています。

まとめに

今回の会議中のマニラは雨期で、加えて台風の影響もあり、時折警報が鳴るような中で開催されましたが、幸いなことに活動そのものへの影響はほとんどありませんでした。

最終日、フィールド訪問の際の移動バス車からは、近代的なビルのすぐ隣にスラム街が存在することも確認できました。フィリピンの豊かさと貧困、発展と停滞、著しい格差社会が垣間みられました。そのような社会環境の中、街中は活気にあふれ、皆さんの笑顔と明るさ、やさしさは、これからのアジアを象徴しているように、発展していくであろう力強さを感じました。

今回の WAsia 会議の私の印象は、これまでの中で最も派手で、最も費用が掛かっており、WJの会議に近くなっていると感じました。2026年度の WAsia 会議は日本で開催されます。本会議の終盤で放映された日本への招聘動画メッセージは、リズムカルに日本の風景を映し出し、ワークショップで活躍している仲間たちを紹介しました。壇上に WJ の参加者全員が上がり、会場を見渡した限り、会場の反応から大きなインパクトを与えたと感じます。

これから、急ピッチで日本開催の WAsia 会議に向けて準備が必要とな



ります。フィリピン会議のように豪華でなくても良いと思います。私達の基本的なテーマである「労働市場で働くことが、より困難な人たちの働ける場所を考える、そして実現する」、そんな日本らしい会議が開催できるようにゼンコロも総力を挙げて努力していきたいと思えます。

WORKABILITY ASIA 2025 マニラ会議 報告

一般社団法人ゼンコロ
常務理事 鈴木 宏
(山形県コロニー協会)

私が初めて Workability に参加した2008年 WJ 札幌はアジアとの共同開催だったことから WAsia は2回目の参加になります。札幌大会は、華やかで国際色豊かな会議だった印象ですが、改めて確認すると、途上国支援について WJ が初めて課題に取り上げた会議であり、当時の WJ (現 WJ) は、国際会議の渡航費用を用意できない途上国への支援の必要性を再認識した重要な機会だったようです。

歳月は進み、経済成長目まぐるしいアジアですが、「アジアの障害者就労支援の現在地は?」、「途上国支援の必要性は?」、「日本開催に向けたリサーチ」等々、私なりのニーズを持つての参加でした。私からは少し視点を変えて、来年の日本開催を見据えた角度から報告します。

1、出発:ゼンコロからは障害当事者含め4名が参加。9月21日15:05 発 フィリピン航空で羽田空港からマニラのニノイ・アキノ国際空港へ。雨季のフィリピンは日本ように異常な暑さは

無く、滞在期間中の90%が曇りのち雨の天気。あやしい勧誘をスルーし、タクシー待ちの長い列へ移動。皆の疲労を勘案し、速やかな宿への移動を優先し、さほど並んでいない業者と交渉し会場兼宿泊先のあるクバオ地区へ。



出発数日前、日本国からマニラ渡航への注意喚起あり。1兆ペソを投じた洪水対策事業が進まず、お金だけ使われた大規模汚職疑惑に対する市民の怒

りが大規模デモになる懸念。道中、運転手が「今日あそこで政府に抗議活動してるよ」と指差した。助手席から見た景色から群衆らしき雰囲気は確認したが、恐怖を感じることもなく無事ホテルに到着。領収書を請求すると「無い」と運転手。事務所にしかないらしく、やむを得ず運転手に支払額を入力したスマホを持たせ、タクシーとの記念撮影に応じてもらった。移動だけでは海外出張の醍醐味の1つ。

2、国際会議の概要…日程は2025年9月22日〜9月24日。会場はノボテルマニラ アラネタシティホテルの2階。約300人の参加者を収容できる規模。主催はデ・ラサール大学セントベニルデ。共催は、「手話はろう者の母語」を合言葉に、国内外のろう者支援を展開する日本財団。会場でのプログラムは理事会、開会式、各種講演、分科会、交流イベント、総会、次期開催告知、閉会式等。3日目のみ外部見学。

3、国際会議環境、設定

①受付、ノベルティグッズ…イニシヤル別で受付。事前に配布されたQRコードでスムーズかつ正確に受付でき、ID配布完了。

国際会議ではノベルティグッズの配布は多いが、今回は特に充実。
【オリジナルのバッグ・メモ帳・ペン、Wasiaピンバッジ、その他】他にも、会議や見学先では参加証を全員に配布。スタッフポロシャツや見学企業からはオリジナルトートバッグとメモ帳等が配布された。



②言語設定と情報アクセシビリティ…マニラ会議含め、国際会議は英語が主言語。フィリピンは英語力が高く、参加者のほとんどは英語に問題がない。この点、日本人は英語障害があり通訳を要する。今回は会場に同時通訳ルームがない上、通信状況が悪く、音声が届いて聞こえない状況が多かった。

日本開催時は、主言語をどう設定するか。また、マニラ会議では2種の手話通訳で全情報を保障。CRPDでは手話を言語と認め、差別を禁止することからも、日本開催時は、日英翻訳以外の情報保障の検討も必要。言語も障害も多様であり、どこまで対応できるかが悩ましい。

③モニターや音響映像…会場レイアウトは、長方形の部屋の短辺の一方にメインモニター、向かって左壁に出入口、右壁にサブモニターを2つというレイアウト。分科会等を行う際は、長編の真ん中をパーティションで二分し、サブモニターを中心に設定し進行。

カメラは、会場中央部の2台でステージを捉える。ハンディも移動しながらモニターや参加者を捉える。映像はモニターに拡大写す以外に、1日の最後に当日のダイジェストを即時編集し、見事なまでにポイント要約映像記録として会議の最後に映して見せた。これはプロの仕事であろうと



推察していたが、3日目のIndustry Visit時、ガイド役の一人でメディア制作担当責任者だったMr. Julius氏と話しした際、「自分が全部1人で編集したんだ」と聞いて驚いた。私は、「プロ並みのクオリティだったよ」と驚きを伝えたところ、謙遜していた。日本にもこのようなスーパーマンがいることを信じてみたい。

④プログラムと会場設定…外部活動以外は、会議も総会も昼食も、全て同じフロア同じ会場で実施。多様な障害のある方々が参加する中、予定により大移動することなく進行できる環境は非常に配慮が高く、日本開催でも参考に出来れば望ましい。



円滑な運営には、多くのスタッフの働きがあった。対応も笑顔十丁寧で欧米よりフレンドリー。嫌な顔をせず臨機応変な対応もこなしており、基本的に困ることは何も無し。

また、アジア時間とはよく聞かすが、プログラムを意識し、会議等の運営進行やTPO等の認識はアジアの中でも浸透されてきつつあるような印象。

⑤会場周辺の地域環境…会場周辺は、マニラの中でも新開発地域で近代的な都会。会場前の大通りは車や人の通行量は多いが、歩道は車道と分離され一段高く、幅が広く安全に移動できた。大型施設にはエレベーターが設置され、車いすでも問題はないが、バリアは多かった。例えば、車道と歩道を繋ぐスロープに段差があったり、スロープが短くて急だったりと、障害者が自力で移動できる場所は限られていた。段差は5cm以上あり、介助者がいないと単独移動は非常に難しい。一方で、人の手による合理的配慮があり、車いすを歩道に上げる際に自主的に手伝ってくれる一般市民もおり、フィリピンの方々には友好且つ協力的な好印象。

⑥外部活動と地域環境…3日目で初めて会場外へ。当初は全員同じバスで移動する設定だったが、ゼンコロの車いす1名に配慮いただき、途中から別途タクシーを一台用意してくださった。

1つ裏通りに入れば、景色が一変しアジアを印象づける景色に。特にマニラ旧市街地は古い街並みや一帯がスラム街。環境はバリアが多く、特に車いす等の身体障害の方には、移動時の障害が大きくなる傾向。

日本開催を想定すると、東京という地域の特異性も認識すべきか。満員電車等、東京在住者以外にとってノーマルではなく、障害とも言える環境が多く、留意すべき。

見学先1は、マニラ市が行う日本の療育センターのような施設。私は、BGC T代表の Sabhaniさんと一緒に回った。「インドにもこのような公設の療育センターはある？」と聞くと、「Absolutely not!」と一言。説明では、子どもだけではなく親子活動が基礎で、親への子育て支援を大切にしている話もあり、BGC Tのバブルスや、私が立ち上げた山形コロニーの療育の考え方に近い点に共感。

2件目は、Shell フィリピン本社。マニラ経済の中心部の大都会に巨大な自社ビルがあり、大企業ならではのオフィス環境や福利厚生の手厚さを説明。一方、障害のある方の姿を探せないことと、ガススタンド現場で働く方との環境格差を感じ、障害の有無や職種によらず、同じ社員として、同質の雇用を保障する努力こそ評価される企



業の質ではないだろうか。日本開催時は、多様な障害のある方が協力し、共に働く環境を是非見学に設定したい。

4、理事会、総会・理事会は、会議開催日の前に実施済み。総会は、2日目の15:00から17:00で実施。Japanの阿由葉理事からは、来年の日本開催について話があり。

5、食事・会議会場で昼食を取れたのは◎。フィリピンのティータムは、サイドメニューが軽食のポリウム。日本の量では足りない? また、フィリピンは歴史的背景や地理的に食も多文化が根付いており、選択肢が多い。アジアにもベジタリアンやビーガン等、食文化の多様性があるため、日本開催時は食事面での配慮も検討する必要がある。

6、帰路・往路と逆ルートで9月26日羽田に無事到着。心配された事故等もなく全日程を終える。

【おまけ】

アジア会議は、もっとささやかで手作り感があるものと私が勝手に想像していたため、近代的で最新鋭で、まるでWJ会議のような立派な会議にギャップを感じました。

主催がデ・ラサール大学ということもあり、聴覚障害系の内容が多かったことや、スポンサー企業を引き立てる演出等も構成されていた印象です。

一方、私たちの課題意識の焦点である「労働市場で働くことに困難が大きい障害者の就労」についての報告がなく、障害程度の重い方への就労支援の必要性と、日本での取り組みを紹介した法政大学佐野教授の報告が、ひときわインパクトを感じました。

マニラ会議の最後に、日本参加者が全員登壇し、2026会議の日本開催を動画で告知しました。私はこの動画制作担当者だったので、Asiaの方々「東京に行きたい」と思ってもらえる動画にしたいと、インドと一緒に活動した学生に協力いただき共同で製作しました。おかげさまで大変盛り上がっていただけでほっとしています。

帰国後、日本開催に向けた検討と準備に残された時間はたった1年。日本会議では、実態的に多くの障害者の職場となっている、いわゆる『シエルトード・ワークシヨップ』機能の現状と今後について、日本の取り組みの共有から、幅広い障害者の就労参加を保障することの必要性等について、アジアの仲間とも今後は一緒に考えていける環境に広がりを持つ契機なれば良いと思います。

マニラ会議では国内の他団体の方々も行動を共にしました。細かいところでは団体による考え方の違い等はあっても、障害者の働く権利を守り、より良くしていきたい気持ちは一致しており、同国の同志と言えます。団体の垣根を越え、WJとして共に行動し、共に学ぶ経験が出来たことは大きな財産

障害当事者から見たWAsia マニラ会議

東京コロニー 東京都大田福祉工場 戸石 薫

私は現在、東京都大田福祉工場で就労継続支援B型の相談支援員であり、同時に重度身体障害の当事者として働く立場から会議を振り返りたいと思います。

会の冒頭スピーチでは主催のデ・ラサール大学学長であるフェルナンデス神父より、「インクルージョンは国境に縛られません。ここで始めた対話を、皆さんの学校、組織、コミュニティに広げてください。なぜなら、この会場を離れたとき、私たちがここで築いた絆によって、真のインクルージョンの活動が続くからです」と述べられ、こ

になりました。日本開催時は、ゼンコロ10法人で参加し、国内外の仲間たちとこのような交流を図れたら最高です。

このような貴重な機会をいただいたゼンコロの皆様と自法人に、心から感謝申し上げます。

の発言で国という境界線に縛られないグローバルな仲間という視点を持つことが出来ました。

WAsiaの会議自体は、二日間に渡り、多くの方が登壇されましたが、私が会議の中で特に印象に残ったのは、フィリピンの障害者政策とアクセシビリティの取り組みです。

テーマ「よりインクルーシブな社会に向けて(フィリピンの取り組み)」登壇者:ミラルダ・タコダオ氏(フィリピン労働研究所、労働者福祉研究部門責任者)

○フィリピン障害者協議会

（NCDA）について

NCDAは、1991年のマグナカルタ制定により設置され、障害者の権利と福祉を国家レベルで推進する中核的な機関であり、政策・制度・実践の三位一体でインクルーシブな社会の実現を目指しています。

フィリピンでは長年にわたり、障害者の人権や法整備に関する取り組みが行われてきました。2013年には障がい者雇用の促進を目的に政府機関における障がい者雇用枠を1%以上にすめられています。



○フィリピン労働省について

フィリピンにはおよそ247万人の障害者がいるとの推測があり、貧困で栄養失調や病気になる、障害を抱える方も多いためです。公共施設のバリアフリー化や手話の重要性はフィリピン国内でも認識されていますが、障害者向けの求人はまだ少ないのが現状です。政府は企業とのパートナーシップを強化し、ジョブフェアなどを通じて社会参加を促進しています。今まで述べ5000人程の障がいのある方が職場実習を行い、内19人がそのまま就職しています。

障がい者雇用では、清掃等の特定の仕事に限定せずに、リモート業務など障害者の能力を活かせる多様な仕事の機会を提供すべきです。

○結論と今後の展望

障害者の雇用とインクルージョンの実現には、政府と企業、NPO、当事者、そして社会全体の対話と協力が不可欠です。法律や制度の整備に加え、意識改革、スキルのミスマッチ解消、そしてテクノロジーの活用が鍵となります。就職機会の創出だけでなく、雇用の維持、キャリアアップの支援、そして安心して働ける環境づくりが重要です。

チーム2「アクセシブルな障害者雇用について」

登壇者：イラ・レイズ氏（フィリピン・Accenture社の人事部門統括）

○グローバルリーダーとしての取り組み

アクセシブルな障害者雇用に関するチームを組織しています。現在、グローバルグループ全体で約9,000人の障害者を雇用しており、その取り組みは40年以上前から継続しています。

ダイバーシティを重視する考えはすでに議論の余地のないもので、単なる社会的な責任に留まらず、企業の収益にも直結すると認識しています。

○障壁を取り除くための具体的な取り組み

2019年にマニラで初のアクセシビリティセンターを開設。視覚・聴覚・言語・移動に障がいのある社員が、最適な支援技術を試せる専用スペースを提供しています。現在は世界40か所以上に展開され、これまでに1,700人以上の社員を支援してきました。フィリピン発のモデルがグローバルに拡張され、アクセシブルなインクルージョン戦略の中核になっています。また、このセンターでは、社員の



ニーズに応じてデバイスの開発や提供も行っています。

• We Walk Smart cane :

AIガイド付き白杖。視覚障がい者向けに、地面の感触を保ちつつ超音波で障害物を検知できる他、最寄りのカフェを教えたり、目的地までの最短距離のルート案内等を行ってくれます。

• Inclusive Virtual Experience

for Everyone (IVEE) アプリ：
IVEEアクセシブルな体験

ピンが開発した、障がい者のための多機能コミュニケーション支援アプリです。音声と文字と手話のリアルタイム変換。コミュニケーションを支援します、等。

【所感】

今回のお話を伺い、国の支援に頼らずとも、アクセシビリティのように企業自らがアクセシビリティセンターを設置し、社員一人ひとりのニーズに合わせて支援機器や働く環境を整えることで、障害のある従業員が力を最大限に発揮できる取り組みを進めているこ

と、これは障害のある人を特別扱いするのではなく、共に働く仲間として活躍してほしいという思いからだと感じました。

そして、この姿勢はフィリピンの街並みを見た時に、地域社会から来ているともとれました。誰かが困ったら必要ときに必要な支援を、自然に互いに差し出し合えるローカルコミュニティがあることで、障がいのある人を、一人の人としてフラットに向き合うことができそうです。その積み重ねこそが、インクルーシブな社会をつくる土台になると感じました。

Workability Asia 国際会議／施設 見聞録

東京コロニー 東京都葛飾福祉工場 上原 里香

フィリピンマニラで2025年9月22日～9月24日開催のWorkability Asia 国際大会に出席し、多くの気づき、出会いがありました。他の組織の方々と交流することが少ない私にとって、日本の施設でいきいきと活動されている皆様と知りあい、お話を聞きできたことは大きな財産です。

今回のWorkability Asia はコロナの影響で6年ぶりの対面開催だった

そうで、びっくりするほどゴージャスな式典でした。インド、マカオ、ネパール、パキスタン、フィリピン他アジア各地域から計300名の雇用主、障害者団体、教育現場（大学）、政府代表などが集結（アメリカなど先進国からの参加もあり）しての大規模な開催でした。

9月22日、23日の2日間はフィリピンマニラのノボテルホテル会場にてパネリストの発表に対して、質疑応答が

積極的に行われる形で進行し、3日目はフィリピンの障害児施設と企業訪問という内容でした。

フィリピンマニラの想像を絶する交通渋滞に起因するのか、それとも夏時間対策なのか、とにかく朝早くから長時間、元気がいっぱいの司会陣の元、休む間もなく次から次にパネリストが壇上に上がり、前向きな討論、発表に続き、活発な質疑応答が交わされていました。

また期間中が聴覚障害者啓発月間だったことから、会場正面に備えられた巨大なスクリーンに国際手話とフィリピン手話の2画面がワイプで映し出され、聾の方々の方も会場よく目にしました。

会議は主にインクルーシブ雇用促進（視点を交えて機会を創出）についてのカンファレンス、質疑応答でした。

会議に出席したことで、日本とアジア諸国の置かれた状況があまりに違うことを知ることができました。日本の障害者が置かれた状況はどこを切り取っても、世界から見ると特殊であり奇異に映るほど保護され、ほとんど保護のないアジアの国々から見ると、その環境の違いに驚嘆せずにはいられません。ただ各国の置かれた状況が大きく違うことで気づきやアイデアが生まれることもあるでしょう。この国際会



議を意義あるものにするためにも（特に企業側からの発言とは言いませんが）取り繕った理想論を述べるだけの討論会にするのではなく、各国の障害者雇用の置かれた現状を正しく伝えあう場にするのが何より大切だと思えました。こんなにも日々現場で頑張っている多くの方々が真剣に耳を傾け、あきらめずに疑問をぶつけあっている姿を目の当たりにすると、取り繕わない先にはきつと絶対幸せな未来があると信じずにはいられません。日本以外は行政の援助はないも同然のようです。自分の力で生きていくことが大前提で、雇用の機会を得ることこそが出発点で、日本のように手厚く守ら

れた現状を理解することは難しく、想像すらできないようです。法政大学佐野先生の日本における障害者雇用のブレゼンを聞いたアジアの方々からの質問で「日本は理解できない」様子が手に取るようにわかりました。

会を通しての意見交換は活発でした。これが日本と海外の教育の差なのでしょう。彼らは思ったことを口にし、こんなこと聞いたら恥ずかしいなんて考えは全く持ち合わせていません。あきらめない彼らの姿に学ぶべきものがありました。

3日目の施設訪問はまずマニラの障害児施設訪問でした。施設運営の行政担当者が終始手厚いサポートを提供していると強調していましたが、正直継続性のない形だけの行政サービスであることは容易に想像できました。実際は障害児1人当たり1か月、それも週に1回程度の親子教育のみの形ばかりの研修のようです。学生、親御さんたちの協力の元、カリキュラムを消化し、その後は各地方の地域センターにゆだねられるという流れだと説明を受けました。その地域センターで何をしているかという説明はなかったですし、18歳を過ぎた障害者がその後どのようなサポートを受けているのかという問いに対しても担当でないのかわからないとはぐらかされるだけでした。

民間企業側も会議の席上では良いことを発表していましたが、実際SHH LSIを訪問し、理想的なことを話す担当者に繰り返し質問すると、実は障害者を雇っているかどうかさえも把握していないことが浮き彫りになっていきました。責めるつもりは全くありません。フィリピンの真の障害者雇用の実態を知りたかっただけに、がっかりしたのを覚えています。

インクルーシブ雇用の大切さはわかります。ただここまで大きな式典を開いても行政にも企業にも声は届いていないようで、会議を開いて何の意味があるのかと正直悲しくなりました。しかし会を運営する彼らにとって、大々的にこういった会議を開くことでマスコミに取り上げてもらい、行政・企業に注目してもらうことが真の目的であることだと知りました。帰国後の10月12日、現地のManira Timesの紙面にWorkability Asia 国際大会の成功が掲載され、フィリピンの彼らにとって今回の国際会議が意味あるものとなったことを確信しました。

最後に、今秋の国際会議開催の地は日本です。理解しにくい日本を知ってもらうためにも真の障害者(雇用)の実態を飾ることなくお伝えする良い機会になればと個人的に願っております。



2026. 11. 24~26

WAsia 会議 in TOKYO

今年は東京開催です。ぜひご参加ください！

特集②

フィリピンマニラ戦跡ツアー報告

マニラ戦跡ツアー

会長 中村 敏彦

はじめに

第二次世界大戦が終結して80年。この戦争は、日本人230万人、世界全体で推定5000万〜8000万人も餓や病気の被害者も含まれます。命を奪うだけでなく、多くの家族を切り離し、多くの人びとの日常を奪う戦争。仮に生き残っても、心に深く残っている憎しみと後悔の念。残念なことに海外では現在も多くの戦争が起こっています。

2度と戦争を起こさないために、私たちにできることが、何かきつとあるはず。

この度の戦跡ツアーは、フィリピンで開催されるWASIA会議への参加を兼ねて、戦跡の視察を予定しています。が参加しませんか? という、「きょうされん」からのお誘いがきっかけでした。6月には事前学習会にも参加させて頂き、学習会上映されたビデオメッセージからは、戦争に関わった元

日本兵の戦後も終わることがなかった懺悔心と、戦争に巻き込まれ、家族を失ったフィリピン人の憎しみと併せ持つ包容心が伝わり、深く考えさせられました。WASIA会議参加のゼンコロ4人全員が、戦跡ツアーにも参加したいと希望が膨らみ実現しました。

ツアー報告

ツアーガイドからは事前資料が配布されており、それによると、フィリピンは太平洋戦争の日本とアメリカ最大・最悪の戦場であり、3つの時期があることが分かりました。

一 日本軍のフィリピン侵攻

(1941年12月8日)

1942年5月6日

日本人がマニラ、バターン、コレヒドール島を占領し、米軍の無条件降伏によりフィリピン全島を占領した時期であり、12月8日は真珠湾攻撃も同時に開始されています。

二 日本軍による軍政時代

(1942年5月7日)

1944年10月20日

日本的な価値観が強要され、軍票(占領地にて軍隊が現地からの物資調達及

びその他の支払いのために発行される擬似紙幣)発行によるインフレで経済が破壊、婦女暴行などで抗日活動が活発化した時期です。

三 日本の敗戦

(1944年10月20日)

1945年9月3日

1944年10月20日、米軍マッカーサー将軍がレイテ島に上陸し、22日には史上最大のレイテ沖海戦が始まります。神風特攻隊も出撃しますが、日本の連合艦隊は壊滅(戦艦武蔵撃沈)、日本軍は制海、制空権を失い、レイテ地上戦は補給なき戦いとなりました。米軍の上陸後2カ月で自活自戦命令が下され、レイテ島は見捨てられることとなります。

1945年1月9日、米軍はリングエン湾より上陸し、日本軍は米軍をフィリピンに拘束して日本本土に行かせないための長期持久戦に転じます。わずか1カ月間でマニラ市街戦により10万人の市民が死亡しました。そして9月3日、日本軍は食料のない山岳地帯に追い詰められ、最終的にバギオにて降伏文書に調印することになりました。

見学・訪問記録

誌面の関係で抜粋して報告します。悲惨な状況をお伝えするために、刺激的な用語を使用していることをお許しください。

① ネルソン陸軍飛行場…日本軍の敗色が濃厚になり、1944年10月6日に山下大将が防衛戦を指揮することになり、着任するときに降り立った飛行場。管制塔は2階建てという低さであつたが、当時はプロペラ機のため、それで十分であつた。

② アメリカ人墓地…米国が海外に所有する最大級の墓地。アメリカ人を含め、フィリピン、ニューギニア方面の戦没者が埋葬されている。墓の数17,113人、行方不明者36,286人。広大な敷地はきれいに整備され、見渡す限りの白い十字架、忘れることは許さないと聞こえるよう



であった。ツアーガイドは、地図上で攻撃や侵略経路な座を示し、地上戦における海軍と陸軍の判断の相違など、悲惨な状況の説明を受けた。

③ パコ駅・1945年2月、駅を防御する日本軍と最初の激しい戦闘があった場所。335人の米軍、417人のフィリピン軍が戦死した。



④ サント・トーマス大学・アジア最古で、ローマ教皇が3度も訪れた世界唯一の世界最大規模のカトリック系総合大学。戦時中は、1942年〜1945年の約3年間、連合国側の一般市民の捕虜収容所で、3700人中600人が死亡。マニラ市街戦で米軍が最初に侵入した場所。

⑤ パシッグ川と万歳橋・フィリピン最大のバエ湖から西に流れる主要河川のひとつ。日本軍は1945年に4つの橋を爆破。日本軍がマニラを占領した際、万歳！と叫んだことから命名された。

⑥ アーミー・ネイビークラブ…1911年、米軍専用の社交クラブとして建設され、日本軍占領時代は水公社(海軍省の外郭団体として創設された日本海軍将校の社交クラブ)として使われていた。

⑦ リサール公園・公園周辺は市街戦の最激戦地。独立運動の礎を築いた国民的英雄のリサール像がある。



⑧ イントラムロス・サンチャゴ要塞…もともとは武器弾薬の倉庫だが、死の牢獄と呼ばれ、日本軍による拷問、虐殺。腐敗した遺体600体が十字架の下に埋葬されている。リサール公園のすぐ北に位置し、16世紀のスペイン統治時代に造られた都市で、実際に城壁に囲まれている。「イントラムロス」はスペイン語で壁の内側の意味。北西端の一角にある「サンチャゴ要塞」は、日本軍政下、憲兵隊本部が置かれていた。フィリピン人は「憲兵隊に捕まったら生きて帰ることはできない」と恐れていたという。要塞の中を進むと、苔と小さな草で覆われた石造りの地下空間がある。この建物は、反日活動していたフィリピン人のゲリラの取り調

べ所で、日本軍がここで拷問したり虐殺したりしていた水牢だったという。スペイン占領時代に弾薬倉庫として使われていたこの空間は、いつからか刑務所のような場として使われるようになり、川の満潮時、この地下牢には天井までいっぱい水が入るので、ここに閉じ込められていた人々は溺死するほかなかった。拷問され、衰弱し、餓死した人も多いたと言われている。この場所では殺された人数、約600人。ほとんどがフィリピン人で、中にはアメリカ人もいたという。彼らの遺骨は現在、水牢のすぐ近くに設置された十字架の下で眠っている。そこに記された碑文には、「日本軍の残虐行為によって人々が殺された」と記されていた。



⑨ サンオーガスチン教会・マニラ市街戦で唯一残った建物で世界遺産になっている。戦時中は約2000人の市民が人質として収容されていた。



⑩ ベイビューホテル・日本軍は約400人の多国籍女性やマニラ中心にあるエルミタ地区の女性たち数百人を監禁し、強姦を繰り返していた。米軍は事件直後に100人以上の関係者から尋問調査をとり、膨大な捜査報告書を残しており、そこから事件の全体像が明らかになった。日本軍の史料はほとんど残っていない。

⑪ ロハス大通り・日本軍がやってくる前、子どもたちは大通りで遊び、散歩などをして楽しんでた。日本軍は、大通りに人が出ることを禁止し、飛行機の滑走路にした。

まとめに

戦争は人を人ではなくしてしまします。殺されることを考えると、命の尊ささえ感じられなくなってしまうのか

もれません。フィリピンの地で戦ったのはアメリカ軍と日本軍、日本軍が侵略したばかりにフィリピンの人たちは被害を受けました。なぜ、フィリピンの人たちが、他国に利用され、他国のために戦い、虐待され、虐殺されなければならなかったのでしょうか。そんな過去に対して、現在、フィリピンの人々には親日家の人が多いと感じます。戦争の犠牲で大切な家族を失った人の恨みと悲しみは消えることはありません。フィリピンでは、許しがたい事実の過去を認識しつつも、反日感情を煽るだけではない、将来を見据えた教育をしていると聞きました。

日本では、侵略や加害をうやむやにする政治家の言葉で、国民の歴史認識は間違ったものになってはいないかと危惧します。平和であることの価値や理念のあり方を改めて考える必要があります。

戦争体験のない私でも、今回のツアーで戦争の恐ろしさを改めて痛感しました。かつて旧満州に出征した経験のある元首相の田中角栄氏は、「戦争を知っているやつがいるうちは日本は安心だが、戦争を知らない世代がこの国の中核になった時が怖い」という言葉を残しています。

日本は、間違いを繰り返してはなりません。世界中の戦争がなくなることを心より願います。

フィリピン マニラ 戦跡ツアー参加報告

一般社団法人ゼンコロ
常務理事 鈴木 宏
(山形県コロニー協会)

今年には戦後80年という節目の年です。「この辛く、苦しい経験から私たちは何を学ぶのか」等々をテーマに、様々な角度から日本でも戦後イベント等が催されています。

私たちは、きょうされんよりお誘いをいただき、WAsia会議後に戦跡を回り、史実に触れるツアーに同行させていただくことになりました。ついては、マニラ会議日程に1日加えた旅程で、参加してきました。

フィリピン渡航前の6月19日には、きょうされん主催の「フィリピンと日本の戦争の歴史を学ぶ」という研修会に参加し、講師の石井恭子さんより、彼女が所属するブリッジ・フォー・ピースの活動や、フィリピン戦に関わった元日本兵や巻き込まれた現地の人々の生の声を収録したビデオメッセージの上映を事前学習として視聴する機会にも参加しました。

その勉強会では、「戦争がもたらすものとは何か」を考えさせられました。

太平洋戦争という歴史と結果を、戦後の人間は我が経験事ではないからこそ、冷静沈着に客観視することができません。国家を上げ、国民の命をかけた歴史的協同は、その史実の中に国が掲げた大義のかけらさえも何一つ成し得ずに、国家国民の救いになるものを生産できていないことだけが際立っています。この戦争の唯一の産物は、我が日本国家国民も、関連した国々の国家国民も、誰一人の幸せにもつながらない、国家による史上最悪な人権侵害という最悪の歴史だけだったと感じました。

これらの戦争は遠い遠い昔ではなく、私たちの祖父母が既に存在し、生活し、私くらいの年代の方なら親が子どもだった頃の話という方もいるのではないのでしょうか。終戦により新たに制定された現憲法が1946(昭和21年)年11月3日公布の翌年5月3日施行ですので、振り返ればまだ少し昔の話です。我が国は大日本帝国という覇権国家でした。その時代の価値観は、国家主導によりゆがめられ、正しいと教えられた国家観や社会観や、立派な国民のあり方などは、本来保障されるはずの希望や夢の形をも強制的にゆがめ、結果として直接的・間接的に戦争に参加した多くの国民は、皆が被害者でしかありません。私はこの事前学習

で感じたのは、最も重要なものは教育であるということです。人間を人間たらしめるものはまさに教育の産物であり、人としてのそれらを構成する上で、とても重要な意図的な働きがけと言えるのではないのでしょうか。障害者と人権という観点でも、やはり制度政策は大事ではありますが、法を守り、運用するのも一人ひとりの人間です。やはり、他者の尊厳を認め、互いの人権を尊重できる人間を育むにも、それにふさわしい教育が重要であり、人権を尊ぶ国家国民の繁栄のために肝となるものであろうと感じた研修でした。

その後、フィリピンに渡航し、3日間のWAsia会議プログラムを終えた私たちは、期待が詰まった戦跡ツアーに参加しました。ツアーガイドの秀子さんからは、戦跡のみならず、フィリピンやマニラ社会や文化や歴史、街並み、国民性や食事等々、分かりやすく要所要所を簡潔明瞭に説明していただきました。

実際の戦跡に足を運んでみると、単に知識的情報とは違った学びを、経験と重ねて学ぶことが出来ました。まさに、歴史書や戦跡ガイド等を丸暗記して、様々な情報を説明できる能力をお持ちの方がおりますが、私自身、そのような知識習得には何の価値も感じま

せん。しかし、その人が旅をして得た経験談等を伺うと、ワクワクし、自分も行ってみたいくなります。また、例えば私が広島を旅して得た経験を例にすれば、その現地に接した際に感じ取った感覚や記憶は、実際の戦禍を経験せずとも、その歴史やその状況に関わった全ての方々の思いや感覚等に、自分の心や感覚等を寄せようとできるのも旅の良さです。正しいかどうかはわかりませんが、自分なりに感じとつてくる、ということが旅の重要な学びである気がしています。

今回のマニラ戦跡ツアーで私が一番実感した学びは、私たちが日本の教育で学んだこの戦争の歴史と、フィリピンで見聞きし、感じた経験とを突き合わせ重ねてみると、日本では、日本の立場での情報の範囲でしか歴史教育していないことに気づかされたことです。確かに沖縄は大変な被害を受け、多くの民間人が犠牲になりました。この私たちが教わった沖縄の歴史教育は正しく、未来永劫忘れてはならない事実です。しかし、フィリピンで日本軍が、現地民間人にどのような犠牲をもたらしたかという話は、日本の教育では教わらないのです。

「戦後80年に接し、私たちはこの経験から何を学ぶのか。歴史の上に立ち、世界各国に、唯一の被爆国としてこの

惨禍を繰り返させないためにも、私たちがすべきことは」というフレーズは、昨夏に何度も色々なところで聞いたフレーズです。

帰国後、改めてフィリピンで何を学んできたのかを考えました。本当の歴史とは何か。本当の教育とは何か。私には答えが分かりませんでした。でも、一つの学び方として持ち続けたいことは、当事者の声に耳を傾け、その思いを聞くことです。これこそが、疑わず、信じて良い情報であり、自分の価値観や歴史観や倫理観等と異なる内容があれば、もつといういろいろな当事者の方々に話を伺うことで、少しずつ霧が晴れてくるのかもしれない。

現代は、誰かが発信した情報が本当の情報かを疑うことから始めなければならぬほど、情報過多の時代です。教本ですら、誰かの意図が含まれればその影響を受けます。正しいかどうかだけではなく、本当の声を傾けていく姿勢と、真実を見極めようとする慎重さが求められている気がします。

もう一つは、その歴史のステージに訪問してみることだと思いました。きつと、何か伝わってくるメッセージがあり、それが正解かどうかはわからなくても、知ろうとして行動することは、大切な学習手法の一つではないかと思っっています。マニラも、そういった

観点からも、訪問するだけで学びになるスペーススポットかもしれません。

結びになりますが、マニラはアジアの繁栄を象徴するような大都会でした。一方で、アジアらしく貧富の差も顕著でした。ガイドの秀子さんは、「日本人は平均値が好きだけど、フィリピンで平均値を出しても、その水準の生活実態がないのです。確かなのは上限と下限があるということです」と話されました。お金を使っても生涯使い暮らしとが隣り合わせで存在しています。

旧市街地には、町全体がスラム街の地区や、戦争当時の昔のマニラの風景のままの建物等も多く残っており、町自体が歴史の教科書の様でした。

マニラに流れるパシッグ川には、今も上流から草の塊が流れてきていました。タガログ語で『May niadt』(ニラッドがある場所)と表現され、それが「マニラ」という地名の由来になっていると秀子さんが説明してくれ

した。私はあの場所を一生忘れません。そこはマニラの街を一望できるパノラマ景観の素晴らしい立地で、右手には繁栄を示す高層ビル群、左手にはスラムの中でも最貧困層が暮らすバラックが重なるスラム街、そして私のすぐ後ろには、サンチャゴ要塞の中で、日本軍がフィリピンの民間人や捕虜を拷問し、惨たらしく虐殺した地下牢史跡がある場所です。そこには、『ここで日本兵が行った残虐行為』という看板と、そこで亡くなった方々の慰霊碑が一緒



に並んでいました。その場所では、日々世界中から来る旅行者に、マニラの地名の由来とともに、日本軍がこの場所で行った惨たらしい歴史を説明する日常があり、永遠に続いていくのだろうと思いつながら、それら様々な歴史や風景のコントラストを感じながら、ゆつくりと流れる川と草をしばしば眺めてました。

そんな私たち日本人にも、笑顔を振りまいて声をかけてくれる現地の人たち。複雑な思いが交錯しましたが、だからこそ私たちは、これからの時代を生きる全ての人たちが、歴史を直視し、正しく学び、その上に立って生きていくべきだと思いました。人種や国家や宗教等が異なっても、侵略や虐殺等の歴史があっても、現実社会を共有する目の前の人々と、それらの違いを前提にしつつも、尊重し合い、笑顔で交流できるように国際社会や国際秩序を高めていくことが重要だと思いました。

この80年の節目が、そのようなことを一人ひとりの自覚として心に刻む契機にして行けたら良いと感じています。このような機会を、ご提案いただいたきょうされんの皆さまと、ツアーガイドの秀子さん、ゼンコロと自法人の方々に、心より感謝申し上げます。

「フィリピン戦跡を訪ねて」

東京都大田福祉工場
戸石 薫

私が今回フィリピン・マニラ研修に参加させていただくにあたり、4日目の「マニラ戦跡ツアー」の参加希望を聞かれました。その際に、幼い頃に父から聞いた言葉をふと思い出しました。「かおちゃんのひいお爺さんはフィリピンの??島で戦死したんだよ。」

父もすでにこの世にはいないため、その??の部分も改めて聞くことはできません。自分でも思い出せないほどぼんやりとした遠い記憶でしたが、ただその事で今回のツアーは、まるで私自身が戦地にいたかのような臨場感のある足音で、私の心に近づいてきました。

フィリピンという土地は、約300年間スペインに占領され、その後アメリカ、日本、再びアメリカの統治を経て独立に至るといふ歴史を持っていきます。それを物語るように、現地を移動中のマイクロバスに乗って走り去る街並みにもそれが見受けられました。コンクリートとごちゃごちゃした電

線が頭上を飾る、熱帯地帯にあるアジア特有の開放感のある街もあれば、とても整理されたニューヨークのウォール街のような場所もありました。しばらく走ると、赤茶屋根の石造りの建物が囲む旧スペインのような街並み、「イントラムロス地区」に辿り着きました。その中にあるサンチャゴ要塞という

所を見学しました。サンチャゴ要塞は、16世紀に建造された歴史的な要塞で、スペイン植民地時代から第二次世界大戦まで軍事・政治の重要拠点として使われていた場所です。太平洋戦争下では、日本軍が民間人や抗日フィリピン軍を捕虜として囲った場所でもありました。



国際人道法では、民間人への攻撃や、捕虜を人道的に扱わないことは違法とされています。私はその時、その場所とツアーガイドのヒデコさんの説明を聞

いた後、自分の無知さを悔やむ事となります。

ヒデコさんはフィリピンに50年以上住んでいる歴史の語り部で、自ら現場に何度も赴き、一方向ではなく多角的な視点で歴史を観測している方です。その言葉には、ありありと紡ぐ、戦争の年月の血が通っていました。

目の前に地下へと続く階段と地下壕がある場所まで来て、ヒデコさんは話し始めました。



「ここは当時、日本軍が抗日フィリピン軍の捕虜あるいは、フィリピンの民間人を拷問や溺れさせて処刑した場所です。その人数は600人にも及んだそうです。この地下壕は隣に川があり、満潮時には川の水で満たされ、中にいた人は溺死するしかありませんでした。逃げ場のない空間にどんどん水が満たされて自分の死の恐怖が迫ってくる、

自分の手を汚さず効率的な方法ですが、同じ人間のする事と思えない、あまりにもむごい殺し方ですね。」

・・・説明を聞き、実際の場所の前で私は、自分がやってしまった事のように罪悪感で胸が苦しくなり、申し訳ないという感情もこみ上げ、その場 hands を合わせました。違うと信じたい気持ちにはありましたが、わずか80年ほど前、私の先祖もここにいたかもしれないという不確かな事実が、私とこの残酷な史実を深く結びつけていました。

そこで、昨日出会った、明るく優しいフィリピン人の青年の顔がよぎりました。とても日本人に好意的で、その青年はフィリピンで流行っているファーストフードのことや、自分がやっている仕事について教えてくれました。1ヶ月でも一緒にいれば、すぐに友人になれたと思います。

そんな彼と、もし僕らも時代と立場が違えば、この戦下の状況に僕らを置き換えたのならば、僕は彼一人の人として見ずに、捕まえ、食料も与えず、拷問し、処刑しただろうか・・・あるいは、声をあげて友人を守ろうとしただろうか。

ヒデコさんの話を聞いて、私がその

場にいたら倫理的に正しい行動をとる自信がないなと思いました。戦時下では皆が自国の守るもののために、すでに多くを犠牲にし、心身ともにギリギリの状態。軍の意向にそむく個人の判断は淘汰されると分かっている、その場の感情で、組織にとつて不都合な正しさを選択する事できないと思います。戦争とはあらゆるモラルに反している、多くを奪い、多くを失い続けなければならぬもので、戦争は個人ではなく、国という単位の意志で終わりを迎えるまで続くものなので。

今回の戦跡ツアーの後、私は自分自身を見つめ直そうと思い、都内や関東にある歴史資料館などに通うようになりました。ネットで調べても感じるこのできない、生々しい当時の戦争の傷や記録を見て、深く自分自身にも戒めることが出来ました。

この地球上では現在も私が生きている同じ時間軸で、地上のほんの僅かな座標の差で、戦争という悲劇が繰り返されています。

ヒデコさんがそうであるように、私も今回学んだ戦争の悲惨さを受け継ぎ、次の世代にも伝えていくことで、過ちを繰り返さない平和な世の中がこの先も続いていくことを願っています。

「マニラ戦跡に衝撃」

東京都葛飾福祉工場
上原 里香

国際会議の翌日 2026年9月25日にきょうされんの皆様に同行する形で、マニラ戦跡バスツアーに参加させていただきました。

ガイドはマニラに長いこと在住し、ガイド歴の長いHideoさんでした。

交通渋滞を考えて早めの出発をし、渋滞を避けながら行先も柔軟に変更して先に進む、なんともおらかなツアーとなりました。

まずはマニラアメリカンセメタリー&メモリアルへ。きれいな芝生の墓地を通りぬけると建物の中の壁には大きな地図がいくつもかけられ、フィリピンが犠牲になった各国の戦争の行路が記されていました。

今回のツアーでは1945年2月3月にかけてアメリカ軍と日本軍がマニラ市街地で10万人以上の市民を犠牲にした激しい戦闘の跡を訪ね歩く私にとって考えさせられるものとなりました。たったの2か月で10万人です。なんてそんな残酷なことができたのでしょうか。心が締め付けられる一日となりました。

リサール公園に立ち寄った後、Hideoさんをお願いして町中でよく目にする、行ってみたかった、食べてみたかった現地のファーストフード Jollibee に立ち寄っていただきました。Chickenjoy と書かれた赤と白の箱を開けるとずっしり重いバーガーが1つ。かと思ったら白ご飯のおにぎり。想定外でした。それとチキンのフライのみでセットで、ソースがたしかついていましたが、正直おいしいかと問われると「はい」とは言いえないものでした。日本では考えられないようなキレイとは言いえない店の床にテーブル。多くの若者でこった返す店内で現地の味を堪能したのち、サンチャゴ要塞で残酷な日本軍の歴史を目の当たりにすることになりました。

入り口付近にはおしゃれなお土産屋さんが立ち並び、アボガドアイスをご



ちそうになりながら、はしゃいでいる私たちがその後、あんなにも残酷な現実を見ることになるのは想像もしませんでした。青空の元、足を進めると歴史あるレンガ造り（石造り）の建物の数々が現れました。最初は趣のある建物跡だなどのんきに構えていましたが、説明の端々に「銃弾の跡」など物騒な単語の数々が並びます。その先にはフィリピン人を地下牢に押し込み、水攻めにして殺したり、飢え死にさせ残虐の限りを尽くした建物が立ち並んでいました。更に歩を進めていくと川に行きつきます。それがパシッグ川です。そこから見える近代的な街と庶民の暮らすバラック。マニラは街のあちこちに富と貧が混在する不思議な都市です。上流に目をやると名前の由来となった日本軍がフィリピン占領の際、万歳と叫んだことから命名された



と言われる万歳橋も見えます。反対側の下流に目を向けると、その先には一度は無くなつたはずのスモーカーマウンテンが再出現しているといえます。必要悪というのでしょうか、これがマニラの現実なのでしょう。

戦闘の中、残酷な行為を繰り返した日本軍に対し、マニラ市民は恨んでいないのだろうか。こんなひどいことをした日本人をなぜ笑顔で受け入れてくれるんだろうと疑問で頭がいっぱいになりました。

趣のある、今ではきれいな公園がかつて残酷な行為が行われた歴史の舞台であったとは正直思えませんでした。EPOCAさんの説明がなかったらきっと深く考えもせず通り過ぎてしまったでしょう。事実を知り、向きあうことができた貴重な体験となりました。

次にスペイン統治時代の面影が残る歴史地区イントラムロスを案内してもらいました。

こちらも趣のある素敵な町並みです。素敵なステンドグラスのサンオーガスチン教会でもゆっくり観光はできません。交通渋滞があるのでさっさと観光し、夕方にはホテルに戻らないといつ帰れるかわからないからです。

最後に歴史感じるマニラホテルでトイレ休憩です。少しの時間ですが、優雅な時間を過ごすことができました。



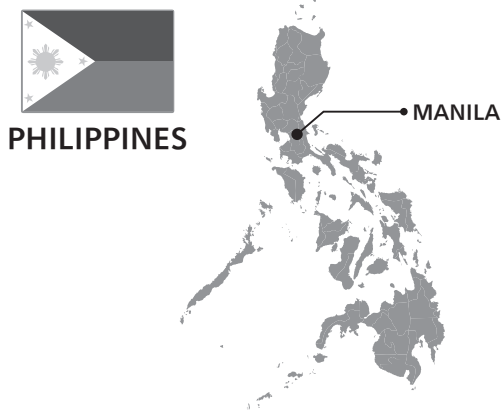
今回のツアーではバスの中から垣間見えたマニラの人々が特に印象的でした。信号で止まった車に何かを売り歩く人、電気や水道から水を盗んで売る人々の話もお聞きしました。日本では考えられない環境下でたくましく生きています。反対に塀に囲われた高級住宅街もあり、先ほど述べた通りマニラは狭い範囲に貧しい人々と富める人々が共存する興味深い地でもあります。

障害者についていえば、今回の滞在中、町中で車いすを見たのは一度きりでした。近代的なホテルの周辺でさえもスクールのせいなのか、縁石が高く、体の不自由な人が一人で行動できるようには整備されていませんでした。

弱い立場の人々へ配慮するには、今のマニラの現状ではまだまだ時間がかかるであろうことは人々の生活を少し

見た私にも容易に想像ができます。インクルーシブ社会の実現のため、あらゆる立場の人々が協力し、周りに優しくできる世の中になるよう、自分でも何ができるかを考え行動していきたいと思えます。

最後になりますが、この式典に参加するにあたり、多くの方々にご協力いただき、またお世話になりました。ありがとうございました。今後もマニラで出会った方々との縁を大切にしていきたいと思えます。貴重な経験をありがとうございました。



2025年度 ゼンコ国際連携交流事業

Biswa Gouri Charitable Trust (BGCT) 等へのベンガル語訪問報告

一般社団法人ゼンコ 常務理事 鈴木 宏 (山形県コロナー協会)

グローバル化が進み、生活も経済も国際的な影響を大きく受ける時代となりました。障害分野も、自国だけの知見や文化観、価値観に基づく制度整備では適切とは言えず、障害者権利条約といった人権レベルの国際基準を基礎と考えていく必要があります。そのためには、国際社会との対話の中で各国の制度や政策、草の根レベルの取り組みから現状と課題を共有し、互いに学び合いながら理想の社会の実現に向けた歩みを進めることが重要です。ゼンコは国際的視点を重視し、海外に学んできた歴史があり国内では先駆的存在でした。新時代に適応する制度政策やコロナーの進化を考える上で、国際的視点は重要であり、海外の障害者団体と独自の友好関係を築き学ぼうと行動した新たな一歩が、2023年度のインド訪問でした。

私たちは「ビスワ・ゴウリ慈善信託 (Biswa Gouri Charitable Trust 以下BGCT)」という、主に自閉スペクトラム症の児童や成人に対し、障害特性に配慮した質の高い教育や職業訓練を保障する団体と友好関係を築きました。1回目の訪問以後、足掛け2年の交流で、主に就労支援事業の新たなメニュー開発を提案し、技術支援を行ってきました。また、直接交流を通じて、日本とインドの取り組みや課題の共通点や相違点等を見聞きし、経験としての知見を広げました。そのような国際的な情報を多くの仲間と共有できるよう、ゼンコ内でオンラインミーティングを何度か実施し、国際事業に関する情報共有や意見交換、今後の事業企画の検討等を一緒に進める機会を新設してまいりました。

1 2023年から2025年2回目訪問までの主な事業連携
BGCTへの就労支援事業開発支援は、「アップサイクルドサンダル(布草履)製作」を中心に、以下を実施しました。

- 使用済み浴衣を活用したアップサイクル事業の意義説明
- ゼンコの歴史・会員法人の事業紹介

2 2025年度2回目訪問(3名訪問)の目的

- ①製作の進捗確認とフォローアップ、
- ②販路調査、
- ③インドの就労支援拠点の実態調査

- 布草履サンプル提供
- 製作技術の共有と指導
- 資材・器材提供
- 製作支援マニュアルの作成
- 販路調査

(1) 布草履製作支援

BGCTでは、資材となる紐製作に挑戦できていましたが、草履を編む工程までは進められていない状況でしたので、今回は、全工程を私が実践して見せながら実作業の理解を高め、彼ら自身の手で試作品製作に漕ぎつけられるようフォローアップを行うことが主な目標でした。初日のワークショップでは当事者と一緒に作業を行い、最終日には支援職員への直接指導を行った他、技術面や資材、工具等に関する質疑に応答しました。代表の Sarpani さんとは、9月にマニラで開催する WAsia会議で再開することを約束し、その際に成果物を持参してもらうことと、私が現地で試作品をチェックし、更なる技術向上のための講評を行うことで約束を交わしました。



(2) BGCTの新規事業開発とインドの就労支援の考え方

BGCTには、「バプルス(児童への教育)」、「プラガティ(15歳以上への職業教育)」という自立に向けた繋がりのある支援事業が整備されてい

す。代表の Sarbani さんに「プラガティはシエルタード・ワークシヨップ (SW) ですか?」と伺うと、明確に「NO」と回答し、「Vocational training (職業訓練)」であり、企業就労へ挑戦したり、戻ったりできる場所であることが重要だと教えてくれました。所得保障の場ではないため、原則賃金工賃等はないが、職業訓練後に皆が必ず企業就労に繋がる訳ではないため、SW の必要性を感じつつも報酬を払いたくても払えない切実な実情があるのであると推察できます。なおのこと付加価値の高い事業開発は喫緊の課題であり、重要な国際協力になると言えます。

インドは給付費により運営を前提とする法制度化された SW はなく、障害の有無によらず働く場は地域社会にあるという考えが一般的で、職業教育を通じて社会に挑戦する力を支援しています。一方、日本の就労支援施策は労働・福祉施策両面で充実する反面、矛盾や障壁を生むなど、制度に振り回され、本當の課題が見えにくくなっていると感じます。このように、日本のような制度整備国よりも、制度化されていない国の方がむしろ国際的多数派であることも学びました。日本の中には、「障害者の働く場は福祉が主流」といったイメージを持つ方々も一定数いると考えられます。この日本の感覚の方が

国際的観点で捉えればノーマルではなく、差別的と懸念される可能性を否定できません。

繋がりのある支援を提供する BGCCT ですが、「所得の伴う就業機会の保障」という最後のピースだけが欠けています。しかし、今回訪問時にサブライズがありました。Sarbani さんから「保護者3名で共同出資し、2か月後に働く場を起業する計画がある」と伺いました。

そこは「SPL END (Special Parents Living & Empowering Neurodiversity の頭文字)」と名付けられ、神経多様性を尊重し、子どもたちの個性と可能性を広げる環境という思いが込められた悲願の職場です。

事業構想は、「カフェ+販売」の店舗経営とのこと。私はより特色が際立つ店舗になる様、①作業体験ができるカフェ、②障害者が働くインクルーシブなカフェ、③日印文化を融合した空間づくりを提案し、好意的に受け止められました。

布草履事業は付加価値が高い一方、技術習得に時間がかかる課題があります。そこで、今回新たに山形コロニーで過去に実施していた「紙ビーズ商品」を新たなアップサイクル事業として提案できるよう準備して訪問しました。そして提案すると、BGCCT 職員

たちも強く関心を示し、SPL END の立ち上げ期を支える事業として期待を持って受け止めてくれました。



(3) 販路・販売協力の可能性調査

販路開拓対象を模索する中で、まずはインドの高所得層にねらいを定めました。在ベンガルの日本企業ネットワークに着目し、ある慈善団体の代表とつながることができました。現地訪問時にお会いし、本事業を説明したところ、事業企画や商品に対する評価は非常に高く、目標を上回る高価格帯での取引の可能性を持ってました。供給体制さえ整えば、このネットワークを通じて、催事等で出品する機会等を得る協力を見込める手ごたえを持ってたと感じています。

(4) BGCCT 以外の障害者支援団体への訪問

今回の訪問では、BGCCT 以外にも2つの団体を訪問しました。

【Diya Foundation】

IT、クリーニング、飲食、小売り、木工など多様な職業訓練を提供する他に、家庭生活面で求められる役割等の訓練プログラムを取り入れる等、成人として自立を果たす支援をしています。職業訓練では、例えば店舗を想定した接客訓練では、メインとなる配膳等の切り出しのみならず、金銭の授受まで実践的に訓練するなど、訓練後は地域で企業就労を見据えたインドらしい訓練メニューに特徴を感じました。IT 技術習得も精神的に取り組んでおり、インドは IT ビジネスに可能性を感じている環境であると感じました。

【Enable India】

インド最大級の就労支援団体の1つで、代表である Dipesh 氏は、WASA の代表でもあります。障害者の就労支援として、職業スキル訓練や教育プログラムの開発・提供、企業支援や雇用開発、障害者雇用に関する啓発活動、重度障害者用支援ツールの開発等を行う非営利団体です。

雇用前の支援としては、障害者のためのオンライン学習プラットフォーム「Enable Academy」を運営し、職業教育の教材や障害特性に応じた学習支援、企業向けの雇用支援ガイド、障害者雇用事例等の情報発信を

行っています。また、通所型で実践的な職業トレーニングを行う「Enable Training Center」もあり、これらはいずれもSWではなく職業訓練の位置づけです。

インドには、過去3年間の平均純利益の2%以上をCSR目的で支出する義務があることを会社法で定めています。Enable Indiaもこのような寄付金収入や企業へのコンサルティング収入、クラウドファンディング等で運営されていると考えられます。そのため、障害当事者の利用負担は無料か低額に設定されていると思われます。さらに「Enable Academy」や「Training Center」で訓練を受けた障害者を対象とした「Employment Services Division (雇用支援部門)」があり、企業との具体的なマッチング支援を行っているようです。これは支援付き雇用に相当する機能を持つ部門であると推察しています。今回、ヘッドオフィスにお邪魔しましたが、印象は欧米の大企業のイメージで、周囲のインドの風景からは大きくかけ離れ、綺麗で近代的なオフィスでした。そこに行き交う多くの人の中には障害のある方が多数いるはずなのですが、誰が障害当事者か全く見分けが付きませんでした。



◆まとめ

2回目の訪問を通じ、インド・ベンガルールにゼンコロと友好関係で繋がる仲間が確かに存在していることを改めて実感しました。ゼンコロの事業がBGCCTの事業に影響をもたらし、彼らが懸命に努力する事業活動の一部を支えています。同時に、私たちも彼らから支えられ、多くのことを学んでいます。国や社会を構成する文化や言語制度、障害者の雇用・就労支援に関する共通点や相違点を、知識として知るだけでなく、経験を通じて会得できる環境ができました。

この協力関係は、今後さらに様々なことについて確認し合える関係性へと

発展し、交流や事業協力を通じて、BGCCT以外のインドやアジアの方々と関係へと広がり、障害のある方々の就労等の社会参加と自己実現が、ゼンコロのビジネスチャンスの広がりと共に発展していく可能性を持っています。毎年訪問することは難しいですが、私だけではなく、様々なゼンコロメン

インドベンガルールBGCCT訪問記

東京「ロニー」東京都葛飾福祉工場 千葉 征一

バーが、今後も国際連携交流事業に参加いただき、国際的な経験と交流を広げる事業として盛り上げていけたらと夢と期待を膨らませています。
このような貴重な機会をいただいたゼンコロ及び会員法人の皆様には、心より感謝申し上げます。

今回、8月1日から5日にかけてインドのバンガロールを訪れ、インドにおける障害者支援の現場を代表する3つの団体であるEnable India(以下、エネブルインディア)、Biswa Gouri Charitable Trust(以下、BGCCT)、Dhya財団の施設見学や交流を行いました。

エネブルインディアでは、施設内の見学や上級責任者のお話を聞き、同団体の活動が障害者本人への職業訓練や就職斡旋のみを主要目的とするのではなく、企業側の受け入れ対応のみならず、企業文化や企業風土そのものに介入するレベルの活動も行っている点に特に強く印象に残りました。具体的

な活動として上級責任者からの説明であった3点として、

①企業が障害者を雇用できない理由を「採用候補者である障害者の能力不足」とは認識せず、企業側の業務内容、評価基準、コミュニケーション様式、職場慣行など、就業に大きく関与する項目を詳細に分析し、「一人で複数の業務を同時に対応すること」「口頭指示を即座に理解できること」「長時間勤務が可能であること」などの、いわゆる「暗黙の前提」を可視化することで、企業側が無意識のうちに前提としている項目の再検討を行い、障害者の能力を企業に合わせて矯正や訓練するのではなく、業務や職場の設計から問い直

す活動を行っていました。

②採用の前段階では、単に候補者を紹介するだけにとどまらず、受け入れ先の部署の管理職や現場責任者に対し障害特性に関する理解促進や受け入れ時に想定される課題についての研修を行うが、その内容は「配慮すべき点」の説明に終始せず、「なぜこれまで障害者がいなかったのか」「現在の職場文化は誰を前提に設計されているのか」を考察する構成にする。

③就労後の定着支援を本人へのフォローアップに限定せず、上司や同僚との関係性や職場内のコミュニケーションの在り方にまで継続的に関与し、業務上の問題が生じた際には、「本人の適性の問題」と決めつけることなく、例えば、「指示の出し方や役割分担に改善余地が存在しないか？」などの視点で企業側と共に検討し、障害者雇用を個人への個別対応だけではなく、企業側の組織学習の機会として位置付けています。

これら3つの活動により、業務の可視化、役割の明確化、評価基準の整理などを改善することは、その企業に勤める障害者に限らず他の従業員の働きやすさを高める効果を持ち、実際に障害者を受け入れた企業の部署では、業務の属人化が解消され、新入社員や異動者の定着率が向上したケースが多々

あるとのことでした。

BGCITの施設内では、紙・布・金属などの簡易的な加工作業を指導員の支援のもとで各部屋に分かれて行っていました。施設では、決まった時間に通い、決まった作業に取り組み、他者と空間を共有するという日常そのものを支援の核としているとのことでした。施設利用者のインタビューでは、「自分が働いて家族の生活を豊かにしたい」という強い意志表示をしている姿が特に印象に残りました。

＜利用者インタビュー内容＞

鈴木…こちらで働いて何年になりますか？

利用者…3年間です。

鈴木…ここでは、どんなことを学びましたか？

利用者…デジタル作業など施設以外で働くうえで必要なことを学んでいます。

鈴木…こんな仕事に就きたいなど夢はありますか？

利用者…デジタルに関係する会社に勤め、両親や妹と共に家族で安定した暮らしを実現したい。

鈴木…そのために今、一番頑張っていることは何ですか？

利用者…家族のことを考えることが、私のモチベーションになっています。鈴木…この環境や仲間、貴方にと

つてどのような存在ですか？

利用者…一歩ずつ前に進むことを考えながら共に働いています。



Diya 財団は、知的障害や自閉症のある若者を対象に就労を通じた自立を現実的な目標として掲げている団体で、施設内では、飲食店での接客補助や会計作業、木工品の製造、野菜を切などの調理といった訓練を主に行っていました。

見学時には、利用者が接客や製造工程の一部を任せられ、試行錯誤しながら作業に取り組む様子が見られたが、指導員は過度に介入せず、利用者自身が状況を判断して、失敗を経験することを許容しており、短期的な効率よりも長期的な成長と自立を重視する現実に即した準備の場となっていると感じました。

なお、施設見学のほか、宿泊したホテル近辺は、複数のホテルが立ち並ぶ

観光客向けエリアで、近くの道路は、

片側3車線の大きな舗装道路の上を高速道路が通る整備された道路でしたが、ホテル近辺の商店が並ぶエリアは、未舗装で信号のない砂利道で、夕方からは、多くの人と車と多少の野犬が秩序なく自由に行き交う風景や道路沿いのゴミ溜まりで牛がゴミを漁るなどの異国情緒を感じることが出来ました。

また、気候については、8月で気温が高いと思ったが、連日30度以下で湿度も低く、猛暑の東京に比べて非常に過ごしやすく快適でした。

そして、最も気にしていた食事については、インド行きの機内食から滞在中にレストランなどで食べた食事は例外なく全部、何かしらの香辛料がふりかけてあり、食材の味よりもその料理に使われている香辛料の辛さや痺れ具合で調味している印象でした。



第10回 ゼンコ版 アビリンピック in やまがた

事業部会 大場 聡 (山口県コーニ協会ワークショップ・山口)

令和7年9月12日から13日にかけて、ゼンコ版アビリンピック(第10回交流型技能競技大会)を山形県コーニ協会にて開催しました。本大会は、アビリンピック(全国障害者技能競技大会)のように日頃の業務で培った実践的な技能を競い合う「DTP・組版競技」とは別に、競技体験を通じて参加者一人ひとりの可能性を広げることを目的とした「チャレンジの場」としての大会があり、職域や経験の有無に関わらず、全国の仲間が一堂に会し、互いに刺激を受けながら学び合うことを特徴としています。

◆「喫茶サービス」「スキヤニング作業」
今回はデモンストレーション競技として「喫茶サービス」、体験競技として「スキヤニング作業」を企画しました。参加者は東京コーニから2名、山形県コーニ協会から3名の計5名で、少人数ながらも交流を深めやすい充実した大会となりました。
喫茶サービスは、昨年に引き続いて

の実施で、競技内容は、①お客様を席に案内する、②水を提供する、③注文を受ける、④受けた注文を調理担当へ正確に伝える、⑤注文内容に応じて必要な物品を準備する、⑥注文の品を提供する、⑦お客様を見送る、⑧使用した物品の片付けを行う、という一連の流れを基本とし、あらかじめ細かく手順を決めすぎるとはならず、実際の喫茶店の環境に近くなるように設定しました。

この競技では、身だしなみや姿勢、礼儀作法、適切な言葉遣いといった接客スキルに加え、周囲への気配りやお客様の様子を察する力、予期せぬ事態への臨機応変な対応力など、働くうえで共通して求められる多くの要素が含まれています。参加者は、飲み物を提供する際のカップやストローの向き、お客様が手に取りやすい位置への配置、注文を受けた後の復唱の仕方、提供までの待ち時間における声かけのなど、競技を通して具体的な改善点に次々と気づき、それらを次の場面で実践しよ

うと試行錯誤を重ねていました。緊張感を保ちながらも、一つひとつの動作や判断に意識を向け、丁寧に競技へ取り組み姿が印象的でした。

競技の終盤には、声かけのタイミングや所作にも余裕が生まれ、自然で落ち着いた接客ができるようになるなど、成長していく様子が随所に見られました。最終的には「ゼンコ喫茶店」として、このまま営業できるのではないかと考えるほどの完成度に達していました。

次に実施したスキヤニング作業は、いくつかの会員法人で取り組まれている書籍デジタルスキヤニング事業の一部工程を体験してもらうことを目的とし、



今後の競技化を見据えた試行的な取り組みとして行いました。体験内容は、①資料の劣化状況を確認しながら刷毛を使って1ページずつ丁寧に清掃を行う「事前確認」、②画像サイズや解像度などを設定して行う「スキヤニング作業」、③正しく読み取られているかを確認する「画像検査」の3工程としました。

作業経験のない方でも取り組みやすいよう、説明を交えながら段階的に進める構成としました。
参加者は、初めて扱う機材や作業工程に戸惑いながらも、ページを傷めないよう慎重に作業を進め、細かなホコリを丁寧に取り除く姿が見られました。さらに、画像検査の工程では、あらかじめ用意された練習用の誤読画像を見つけて出すなど、高い集中力を保ちながら作業に取り組んでいました。こうした体験を通じて、決められた手順を確実に守ることの重要性や、品質を維持するために確認作業を行うことの大切さを実感する機会となりました。

◆芋煮会で舌鼓

競技前日には山形県コーニ協会の皆さまのご厚意により、施設見学に加え山形市で毎年開催されている「日本一の芋煮会フェスティバル」の会場や、実際に使用されている日本一の大鍋「鍋太郎」を見学させていただきました。



夜には芋煮会を開催していただき、かまどに薪をくべて作る本格的な芋煮は、里芋のホクホクとした食感と、肉の旨味が溶け込んだ深いコクのある優しい味わいで、参加者一同大変おいしくいただきました。さらに、フルーツ王国ならではのシャインマスカットや梨など、新鮮な果物も堪能しました。

参加者全員で鍋を囲みながら近況報告や意見交換を行い、地域ならではの郷土料理や特産品を味わうことができただことは、参集型開催ならではの大きな魅力であり、交流を深める貴重な時間となりました。このような機会をご提供いただき、温かくお迎えくださった山形県コローニー協会の皆さまに、改めてお礼申し上げます。

最後に、本大会は経験の有無に関わ

らず作業の進め方やより良い作業を行うためのポイントを、ゼンコロの仲間と一緒に確認しながら学ぶことができ、経験がまったくない方でも気軽に参加できる内容となっておりますので、今後さらに多くの皆さまにご参加いただき、それぞれの可能性を広げる場として活用していただければ幸いです。



ゼンコロアビリンピックに参加して

山形県コローニーセンター
阿部 優

山形コローニー（B型）からは喫茶競技に1名、デジタル化スキャン体験に

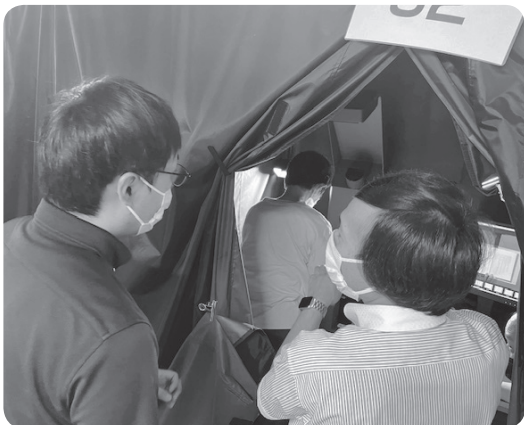
2名の参加希望があり、私は引率者として初めてゼンコロアビリンピックに参加させていただきました。喫茶競技に参加した当事者の方はアビリンピック山形県大会2025にも出場し、その時に上手くできなかったところをもう一度頑張りたいという想いで参加されました。仕事の合間や自宅で接客の流れを何度も練習し、一生懸命取り組まれていました。当日は緊張した様子も見られましたが、徐々に慣れ、お客様からの突然の質問にも自分なりの言葉で対応するなど笑顔も出てきて自然な接客に変わっていったのがとても印象的でした。スキャン体験に参加希望だった2名もお客様役や接客係にチャレンジしながら、参加者・引率者全員で喫茶競技を行い、技能を高め合える時間になったと思います。

その後のスキャン体験は山形コローニーのデジタル課職員からレクチャーを受け、参加者全員で書籍の電子化作業を体験しました。東京と山形でも違いがあり、B型の職務創出の視点や支援方法を共有する等、今後の仕事に活かせる意見交換をすることができました。

競技前日は、山形の秋の風物詩「芋煮会」を企画し、一緒に作って食べました。全国のコローニーの仲間と交流する機会はなかなか無いので、とても有意

義な時間でした。

地方大会は型にはまった感じが強く、重い緊張感が漂いますが、ゼンコロアビリンピックは参加者の皆さんの自然に出てくる言葉や行動、ふとしたときに出る笑顔等、その人の良さを引き出させていたように感じました。今回引率として初めて参加させていただきましたが、日頃の業務とはまた違った参加者の頑張る姿を見ることができたこと、全国の仲間との交流という貴重な経験ができたことをとても嬉しく思います。ゼンコロアビリンピックが続いていき、今後多くの方がこのような機会に参加できると良いと思います。当事者の参加が増えることを願っています。



.....



山形県コーリーセンター
山本 鏡介

初めての参加で不安を抱えてのスタートでした。喫茶は一番緊張しましたが、なるべく

マイナスな表情を見せないよう心がけました。デジタルの事前確認では本を丁寧に扱いながら一つ一つ確認し、スキャンでは左右均等になるよう意識しました。堅苦しい雰囲気もなく皆さん温かく見守って下さり前向きにチャレンジすることができました。東京コーリーのデジタル化作業についても知ることができ、とても貴重な1日を過ごすことができました。今後機会があれば参加してみたいと思います。

山形県コーリーセンター

阿部 進



ゼンコロイベントには何度か参加した事がありますが、アビリンピックは初めて参加

しました。初日は芋煮会で全部自分達で作りました。僕的には上手にできたと思います。自分から話もしたかったが、言語障害があり上手く話せませんでした。



2日目は競技で、喫茶では上手く人と接することができなかったが、デジタルでは職員から「丁寧ですね」と声をかけてもらいました。機会があればまたゼンコアビリンピックに参加したいです。

障害の有無はその人の人間性や優劣を決めるものではありません。互いが違いを認め合い、誰もが楽しく暮らしやすい社会を共に築いていきたいです。



山形県コーリーセンター
美濃 節子

私はアビリンピック山形県大会2025の喫茶サービス競技に参加しましたが、最

後伝票を渡すのを忘れて失敗してしまいとてもショックでした。今度は上手くできるようにしたいと思ってゼンコアビリンピックに参加しました。声も大きく出して大成功でした。ゼンコアビリンピックの経験を活かして次のアビリンピック山形県大会ではメダルや賞状を目指して頑張りたいです。



ゼンコロ版アビリンピック山形

東京コロニー コロニー東村山
増田 有紀



今回のゼンコロ版アビリンピック山形で、私は支援者として始めて利用者を連れて越県し、宿泊をして支援をするということを行いました。経験したことのないことでありますので不安は非常に大きいものでした。新幹線への乗車の際にきちんと利用者が乗り込むことが出来ず大宮駅に置いてきてしまいはしないだろうか。行った先での食事はどうしようか。行った先での食事は事前に確認する必要があるだろうか。(特に今回共に参加した利用者には食事の面で注意する必要がある方がいま

した) 外泊するという普段とは違う状況で利用者さんたちが不安に思ってしまったのだろうか。

また、そうした場合はどういった対応を取ることが適切なのだろうか。挙げればキリがありませんがとにかく行く前は考えることが多く、職場の他の支援者から助言を頂き準備をしました。

しかしながら終わった今、行く前に自分が考えていたものはほとんどは杞憂に過ぎませんでした。新幹線では私が利用者の方に利用ホームの番号を覚えてもらっていました。食事に関しては職員から提案した内容で利用者同士で話し合い、適切に決めていました。宿泊先では私より先に起きて自分で身支度を整えていました。結果として誤解を恐れずに言えば、旅行のような出張であったと言いたいと思います。もちろん今回参加してくれた2人のパーソナルな部分、当法人の所内や今回のゼンコロ版アビリンピックの運営に当たっていただいた全ての皆様あってのことではあるのですが、今回の私がそうであったように、案外行ってしまうなんてかなるものであると感じました。この記事に目を通していただいている皆様、いかがでしょうか。利用者を持って出張へ行くことに対

するハードルを私の感想で少しでも下げることが出来たならこれほど嬉しいことはありません。是非とも次のゼンコロ版アビリンピックにてお会いできるのを楽しみにしております。

また、宣伝になりますが今回のゼンコロアビリンピックに参加した際の様子から帰りまでの全記録をまとめた内容が、私の所属する「コロニー東村山」のブログ記事に掲載されております。もしよろしければお時間あるときにもご一読いただければ幸いです。

.....

コロニー東村山 岸 浩平



私が一番思い出に残っているのは皆での芋煮作りです。火を起こして、具材を切って、鍋で煮込んで、味付けをして、器によそって全ての工程が楽しかったです。また機会があればやりたいです。

アビリンピックではウェイターの実演が一番に残っています。普段のコロニー東村山では出来ない業務なので新鮮でも楽しかったです。スキャン体験では普段行わない事前検査をやったことが心に残っています。

.....



コロニー東村山 福井 理人

いろいろなことをすることが出来ましたが一番の思い出は芋煮を作ったことです。

火起こしは木が湿っていたのかつけるのが大変でした。芋煮会場で使用する鍋の大きさには驚きました。

アビリンピックでは喫茶サービスとスキャンング作業をやらせていただきました。喫茶サービスでは1人の場合だけでなく複数人での接客も経験でき、とても楽しかったです。また参加できる機会があればぜひ参加したいです。



ゼンコロ版アビリンピック・組版部門の開催

山形県コロニー協会 平田 信子

ゼンコロ版アビリンピック(第10回交流型技能競技会)がオンライン及び山形で11月26日に開催されました。2015年に第1回としてながので開催され、その後、第5回の熊本からコロナ禍のためオンラインとなりました。第10回の今回は、初めて競技課題をDTP(組版)とした開催になりました。

交流型技能競技会は障害当事者の更なる自己啓発と当事者間の連携を高めるとともに、アビリンピックへの参加を推奨し、仕事に対する自己意欲の向上を図ることを目的に、加盟法人の共通項が多いDTP作業を種目にして競技会形式で開催されてきました。

今回初めて「組版」という形での開催となった経緯について少し触れておきたいと思います。

令和3年にゼンコロ会員法人の印刷を行っている事業所間の交流を通じて、各事業所の課題や取り組み内容等についての意見交換や事業所間の連携体制の向上を目的に、印刷を行う事業所間交流事業「制作課」交流会が行われました。令和4年の交流会で「例年、ゼンコロ版アビリンピックはチラシ、バラ物の競技ですが、得意分野でもある文書物の組版競技があっ

てもよいのではないか」という意見があり、競技化の検討が始まりました。令和5年には①競技課題の設定、②競技会の形式、③作品の評価や採点の基準、④競技化に向けたアイデアなど、具体的な競技内容の検討が行われています。これらを踏まえ、令和6年に課題案として、会報ZENCOLOの中の「北から南から」のコーナーの編集作業が提案され、

①概要、②編集指示、③審査方法(基準点、出来栄点、作業効率点)、④競技課題(競技時間、作成物、採点方法)について具体的なルールが検討されました。その後これらの要領を踏まえ、青森、山形、長野、山口が参加してトライアル作品の作成を行いました。その結果、競技時間、課題設定、課題の仕様等、支給データ、審査のポイント・方法等について競技課題を具体化し、組版競技をテーマで開催するに至りました。

今年の課題は、「会報ZENCOLOのゼンコロ推し自慢のコーナーの編集作業」です。内容は各ゼンコロ加盟法人から寄せられたお薦めの名所やお店などの紹介文と写真をバランス良く配置し4ページにまとめ、北から順に10法人分を流していくこととしました。競技で使用

する文字・画像データは事前に各ゼンコロ法人より提供していただき、全国のコロニーの特色ある内容となりました。仕様を会報ZENCOLOをベースとしたことで取り組みやすさもあったと思います。

今回は前回からの変更点として、平日開催として平日競技で順位付けはしない、ということと、課題は事前にお知らせして、メインタイトルは制作して持ち込み可能にすることで、負担軽減につなげました。

その中で10法人の紹介文と写真を全て使用して縦組を編集することについては、いかに手際よくスムーズに編集していくかが一つのポイントになったと思います。その点からみるとチラシのように自由度は少なくルールに制約されがちですが、その分タイトルや写真の扱い、競技のポイントとなるレイアウトのバランスや色づかいによる見やすさが重要な要素になったと思います。今回の競技会では、各法人から10人が参加されましたが、どの作品も限られた時間やルールの中で、随所に工夫が施されたデザインにするなど、変化に富んだ作品を作りあげることができたと思います。

近年デジタル化が進み、印刷物の現状を考えると、編集作業の体裁など以前ものを繰り返して使っている事に慣れ、新規に独自性をもって作成する機会が少なくなつたと感じています。組版技術の向上のためにも、今回のように「から体

裁を作成するという課題の競技会は組版の基本を改めて見直すよい機会になったと思います。また、レイアウトなどは人それぞれ個性が発揮できるものだと思いますが、組版ルールにはいつの時代も全員が共有できる基本的な知識と技術が詰まっています。このような組版ルールは、今後ぜひ引き継いでいきたいと考えています。さらに経験を積み重ね、さらなる知識と技術の向上を目指して欲しいと思います。

今回の競技会を通して、参加された各法人の参加者はもちろん、全国のコロニーが互いに技術を高めあえるよう、これからも情報交換等のつながりを大切にしていきたいと感じました。

今回の組版競技の導入は交流会の情報交換での何気ない発言がきっかけとなりました。交流会を通してゼンコロの皆さんの意見が競技の質を高めていくのだと感じました。改めて、全国のゼンコロの仲間たちがこのような交流会等を通して切磋琢磨しながら技術の向上に努めていけたら良いと感じたところです。

今回の競技会の開催にあたりゼンコロの役員の方々ははじめ、競技会の準備運営に携わっていただいた全ての方々からのご指導とご協力、そして貴重なご意見を頂きましたことに心から感謝申し上げます。今回の競技会で得られた成果と課題を共有して今後活かしていければ良いと考えております。

「ゼンコロ推し自慢」全4ページのうち最初のページを掲載します。

▲青森コロニー 土嶺 シオンさん



▲青森コロニー 石郷 和也さん



▲山形コロニー 荒木 哲英さん



▲青森コロニー 花田 章夫さん



▲山形コロニー 荏司直人さん



▲山形コロニー 佐藤 恵美さん





◀ながのコーニー 井浦 やよいさん



◀ながのコーニー 戸田 晴賀さん



◀山コーニー 高橋 卓哉さん



◀東京コーニー・東村山 安藤 大さん



記念品のペンケース(アートビリティ制作)とフリクションペン



山形コーニー参加者のみなさま

参加者コメント

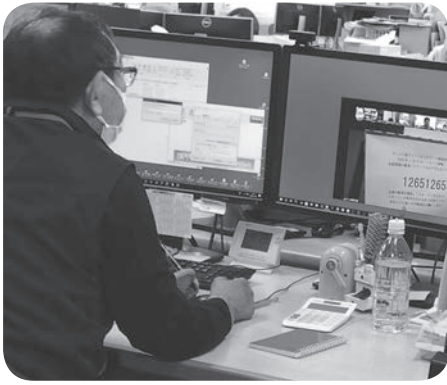
●青森コローニー 土嶺 シオンさん

今回初めての組版でのアビリンピック参加となりましたが、大変楽しく参加させていただきました。また次の機会があれば参加したいと思っています。

今回は、準備の段階で用意しておくべき物などが、あまり思いつかず準備が不十分となってしまいました。次回はその経験を活かし、イラストやデザインに力を入れ、満足のできる作品を作れるようにしたいと思います。

●青森コローニー 花田 章夫さん

アビリンピック当日、会場は普段と変わらない場所だったので特別ではないと考えようと思いましたが、いざ



Zoomでのやり取りが始まると、一気に緊張が押し寄せました。競技開始後は、時間と焦りとの戦いでした。写真配置に手間取り、最終確認も画面上のみとなった結果、文字の流し込みミスなどを拾いきれないまま終了。悔いの残る結果となりました。

●青森コローニー 石郷 和也さん

初めての組版でのアビリンピックに参加しましたが、休憩までは順調でしたが、残り時間を勘違いしてしまい、写真の大きさを合わせるより、小見出しに時間を使ってしまいました。その結果、写真調整が不十分のまま終了してしまいました。非常に後悔の残る作品になりました。今回の反省を活かし、次回は全体のバランスを考え、納得のいく作品を仕上げたいです。

●山形コローニー 佐藤 恵美さん

今回の競技会終了後の第一声は「難しかった」でした。本番までの準備段階では、素材選びやタイトルの案作成など、わくわくしながら楽しく進めていたのですが…。いざ、課題に取り組んでみると、思い通りにレイアウトが決まらず、気が付けば終了時間が近づいていました。自分の中では、中途半端での提出となり、悔しかったです。この経験を日々の仕事に活かし、組版をより深く学んでいきたいと思えます。ありがとうございました。

●山形コローニー 荘司 直人さん

ゼンコロ版アビリンピック組版競技は今回が初開催でした。事前の配付資料では、競技の流れや作業内容が把握できず不安でしたが、本番では普段の仕事内容に近いこともありスムーズに取り組みました。

ただ短時間での競技だったため、納得できる内容までたどり着けなかったのが残念でした。

段取り、作業スピード、正確さをさらに意識しながら、これからの仕事に活かしていく良い機会になりました。ありがとうございました。

●山形コローニー 荒木 哲英さん

就業時間中のリモート開催で10施設

分のテキストと各写真1枚をA4の4ページに収める組版ページ作成でした。ゼンコロ会報の「北から南から」がカラーになったらのイメージで作成していきましたが、写真のサイズと配置に手間取ってしまい、150分の競技時間内に作品を仕上げられず残念でした。その後の意見交換会では参加者の説明を聞きながら作品を見ることで、改めて作業手順を見直す機会と新たな刺激を受けました。次回の記念品は熊よけスプレーをお願いします。

●ながのコローニー 戸田 晴賀さん

アビリンピック初の組版競技に参加しました。事前にタイトル等は用意でき、文章と画像は当日支給。淡々と作業をし、焦らないように心がけていましたが、綺麗に収まるような画像のサイズも決まらず、時間だけが過ぎていき、うっすらと焦りがでてきました。結局様々な画像サイズになってしまい、文章を綺麗に収めることができませんでした。普段仕事をしていると気づかない苦手な点に気づけてよかったです。

●ながのコローニー 井浦 やよいさん

ゼンコロ版アビリンピック参加して出来るかどうかやってみました。『2時間なら進められる…』と自信持って、

どういう風に広報誌作るか、イメージにして制作続けていきましたが、しかし、時間が短くなっていくとイメージが上手く出来なかったり、文字数がたくさん空けてしまったり、ギリギリに作業しました。

制作してみて、思ったよりイメージが違ったと思いました。自分はまだまだ実力足りないという経験しました。

●東京コロニー・東村山 安藤 大さん

今回の課題は、冊子の1コーナー(4ページ分)を作成するという、従来とは異なる課題でしたが、こちらの方が日常のDTP作業に近いこともあり、「リラックスして臨める」と思っていました。ところがいざ本番となると結構緊張してしまい、完成することは出来ましたが、時間配分の難しさを改めて痛感しました。

事前準備で用意した素材は手応えを得られたので、次回があれば、それ以外の部分を手際よくこなしたいと思いました。

●山コロニー 高橋 卓哉さん

昨年はアドビ認定プロフェッショナル(イラストレーターCC2024)の資格を受験したり、全国アビリンピックにも挑戦しました。その上でゼンコアビリンピック組版部門の話をい

ただき、課題練習に取り組みました。自身の技術向上につながったと思います。デモンストレーション競技で、順位付けはなかったのですが、満足のいく作品を仕上げました。今後またにつながるスキルを磨いて挑戦してまいります。

付添者コメント

●「組版の伝える力」

青森県コロニー協会 岩間 孝行
この度、ゼンコアビリンピック組版部門に、参加者の付添者として参加させていただきました。リモート開催ではありましたが、参加者たちのピリピリとした緊張感と、それでいて「良いものを作ろう」という静かな熱気が感じられました。普段、一番近くで参加者を見守っている支援員の一人として、彼らがこの日のために積み重ねてきた努力が、モニターの中で形になっていく様子を間近で応援できたことは、私にとって

も本当に楽しく、心温まる経験となりました。

いざ競技が開始されますと参加者の皆さんの競技に向き合う姿勢がとても印象的でした。業務の都合や環境の違いもあり、大会に向けた事前準備や練習時間の確保については、参加者それぞれにどうしても「ほらつきが出てしまっていたのが実情かと思えます。それでも画面を見つめる視線は真剣でマウスを動かす手つきはとてもスムーズでした。

今回の課題は「簡単すぎず、難しすぎない」、参加者の実力を引き出すのにちょうどよい難易度だったと感じます。その中でも、多くの参加者が頭を悩ませ、そして工夫を凝らしていたのが「指定された内容を、いかに美しく4ページに収めるか」という点でした。支給さ

れたテキストや写真は分量も多く、ただ並べるだけでは溢れてしまったり、逆に間延びしてしまったりします。情報を読みやすく整理しつつ、デザインとしての美しさも保ちながら、きっちり4ページに着地させる。試行錯誤の熱量が伝わってきました。日頃の業務で培った「伝える力」が色濃く表れていたように思います。

おわりに、制限時間いっぱいまで粘り、自分なりの正解を導き出した参加者の表情は、スタート前よりもひと回り大きく、自信に満ちているように見えました。「大変だったけれど、楽しかった」終了後に聞けたその言葉が、今回の大会の充実ぶりを何よりも物語っています。順位や結果ももちろん大切ですが、それ以上に「限られた条件の中で、最善を尽くして表現する」と



青森コロニーからの参加者のみなさん

善を尽くして表現する」という組版の楽しさを、参加者自身が再確認できたことが、今回の一番の収穫だったのではないのでしょうか。この大会を通して得た「工夫する楽しさ」や「壁を乗り越えた経験」を、明日からの仕事や生活の自信に変えていけるよう、これからも温かく、そして力強くサポートを続けていきたいと思えます。

●「ゼンコロ版アビリンピックDTP組版終えて」

山形県コロ二協会 板坂 友昭

一昨年から立ち上がったゼンコロ版のDTP組版アビリンピックですが、色々課題内容やルール決めなど悩みました。はじめに頭に浮かんできたのが、組版のベースは統一されていて各法人で使っているソフトの環境設定や細かい決め事が違うだろうという事でした。次に浮かんだのが課題内容でした。私自身もDTPアビリンピックに参加した事がありましたが、どうしても得手不得手のジャンル次第で気の持ちようがだいぶ変わってきます。初めて組版アビリンへ参加する方がいきなり不得意なものに取り組むのは大変だろうと考えました。

そこで考えたのがゼンコロ各法人に配布されています「会報ZENCOLO」でした。その中でも気軽に読めるコーナー(携わっている方スミマセン)の北から南からです。これなら見本として誰もが目を通していき、体裁もイメージし易いと思いました。内容もざっくりぱらんとした気軽な内容に変えて、細かい組版ルール等は最初決めますにまずやってみようと思いました。

そういう経過をたどり数回にわたリリモート会議を重ねて、一昨年にデモンストレーション大会を行いました。完全

な手探り状態での大会だったので上手く出来るか不安でしたが皆さんの協力をいただき無事終えることができました。いくつかの課題は見つかりましたが、それなりの手ごたえはあったと感じました。

昨年11月にデモ大会より数段競技色を高めたゼンコロ版アビリンピックDTP組版競技が総勢10名の参加のもとリモートで行われました。この大会では記事や写真も各法人から決められた内容に沿ったものを準備していただき、タイトル類は事前準備OK、ある程度決められた体裁とページ数に納め、制限時間内に完成提出という内容になりました。競技後の意見交換会では参加者から時間的に厳しいという意見から、上手く流し込めなかつた、写真の配置に苦労したなど様々な意見が出されました。この大会では審査をせず提出作品を配布する形になりましたが、制作された皆さんの作品を見てやっと最初の苦労が形になったなと内心ホッとしました。この大会を通して段取りから大会運営まで多大なる準備等していただきましたゼンコロ星事務局長、ながのコロ二柳澤部会長はじめ、数多くの方からご協力いただいた成果だと思えます。ありがとうございました。参加された選手の皆様も本当にお疲れ様でした。

●「DTP組版部門への参加を通して」

ながのコロ二 長野福祉工場

制作課 堀内 美希

11月26日に開催されたゼンコロ版アビリンピックに当法人から二人、参加しました。リモートでの参加であることや、使用するデザインソフトも日頃の業務で使用しているソフトを使用していること、一人とも参加に對してはとても積極的な様子でした。戸田さんは同年のアビリンピック長野県大会のDTPデザイン部門にも参加されましたが、その時のことも思い出しながら「普段の業務環境とは違う大会の独特な緊張感がある。」とその緊張感を逆に楽しんでいられるようでもありました。井浦さんは長く組版部門の作業をされていることもあり、課題内容への不安はないようでしたが大会競技への参加が初めてということ、直前には少し緊張が勝っているのがこちらまで伝わってきていました。

競技課題についても、本番当日まで使用画像や原稿の文字数などが分からない状況の中で、目を引くデザイン・見やすさ・他と被らないオリジナリティなどをメインに課題練習に取り組んでもらいました。それでも、当日実際に原稿を確認してからは思うように進まず、二人とも苦労している様子がうかがえました。戸田さんはスタートが早く、順

調に文字の流し込みや画像の配置が出来ているように感じました。井浦さんは土台となるアートボードの作成に少し時間を取られている印象を受けましたが、その後は流し込み・画像配置などで追いつき、戸田さんとの差を一気に詰めて行きました。こういった細かい部分に勤務年数の差が表れるな、さすがだなと感じたのと同時に戸田さんが2年という僅かな勤務年数の中で、こういった大会競技という場で技術を披露できていることにも驚きました。競技後の意見交換会の際には「あのデザインが見やすい。」「あのタイトルは目を引く。」と二人で口々に話しており、大会に参加することや課題練習に取り組むことも意味のあることだと思えますが、そこから今後にどう繋げていくかが大切だと思っていましたので、誰に言われるでもなく二人が自主的に他の参加者の作品から学べる部分を必死に吸収している様子が、とても印象的でした。

今回は順位のつかないデモンストレーション競技でしたが、実際に大会と同じように行えたことで、競技後は二人とも個人の苦手な部分を見つけたことができたようです。一人とって様々なことが経験できるとも良い機会となつて良かったです。

●アビリンピック奮闘記

く付添人、気を揉むく

東京「コロニー」「コロニー東村山

東 道生

「コロがんばってね」

競技当日の朝、営業係の方から声をかけられる安藤さん。ありがたい激励のはずなのに、付添人の私は内心ヒヤヒヤしていました。安藤さん、プレッシャーに弱いんです。応援の気持ちだけ受け取って、緊張はしないでくれー。

今回のアビリンピック、コロニー東村山からは安藤さんがエントリーしました。第2回大会から参加し、インターネット開催になってからは皆勤賞の常連選手です。これまでの課題はチラシなどのデザインでしたが、今回は初めての組版。参加するか尋ねると、すぐに「参加します」と返事をくれました。普段から組版は頻繁に手がけているだけに、本人はそれほど不安ではなかったようです。不安だったのは私のほうです。

例年は土曜日開催で、誰もいない静かな部屋で作業できました。ところが今回は平日開催。周りでは通常業務が粛々と進んでいます。これはまずい。電話は鳴る、人は歩く、誰かが話しかけてくるかもしれない。そこで私は動きまわりました。まずはパーティーションで安藤さんの席を要塞のごとく囲い込み、外界を遮断。さらに「競技中は話しかけないで」

「内線電話もかけないで」と、周囲のスタッフや営業係に根回しして歩きました。やれることはやった。あとは祈るのみーと思っていた矢先の、冒頭の激励です。大丈夫だったかな、と少し気になりながら競技開始を迎えました。

今回は初めての組版課題。普段やっているとはいえ、競技となると何が起るかわからない。しかもプレッシャーに弱い安藤さんのこと、限られた時間の中で納得のいく仕上がりにできるか、私もパーティーションの外で手に汗を握りながら見守っていました。

結果は――さすがの安藤さん、口頃の實力どおり、しっかりと時間内に完成させ、出来栄えのほうもまずまずでした。ほっとして肩の力が抜けたのは、本人より私だったかもしれません。

今回はデモンストレーション競技として審査や順位付けは行われませんでした。だから気楽に取り組めた部分もあったでしょう。でも、もし審査が行われていたら……優勝？入賞はできたかな？競技後の懇親会でも、安藤さんはリラックスした様子で楽しんでくれました。

来年の課題はまだわかりませんが、大会が開催されればぜひまた挑戦してほしいです。

競技課題 (DTP (組版))

1. 課題設定

あなたは11月に発行予定の会報「ZENCOLOR」にある「ゼン」コロ推し自慢のコーナーの編集作業を依頼されました。内容は各ゼンコロ加盟法人から寄せられたお薦めの名所やお店などの紹介文と写真をバランス良く配置し4ページにまとめるものです。

※右記の広報誌を作成することを課題とする

※北から(青森、山形、ながの、東京、あかつき、山口、福岡、佐賀、熊本、沖縄の順に)流していくこととし、事業所名・役職・氏名のスタイルは自由とする

※指定のないところは各自工夫し、アイデアに富んだ広報誌に仕上げること

※タイトルや本文中の空スペースに使用したいイラストや飾りなどは著作権に注意の上、事前に用意をする。事前に制作したもののみ当日の持ち込み可能(競技時間中の用意は不可)

2. 課題の仕様等

① A4縦置き4ページ内に全てを収める、裁ち落としはしない(右綴じ)、縦書き

※全ページとも版面領域はA4の中

心とする

② 本文体裁は縦組4段、段間は2字アキとする

※1段は1行18文字、行数は32行で構成すること

※文字の大きさ、字送り、行送りは任意とする

※本文に使用するフォントは明朝体とし、それ以外のフォントは指定しない

③ ②の版面以外の部分にノンブルを入れる

※場所、スタイルは問わない。ただし開始ページ数は8ページとする

④ ごく一般的な行頭・行末禁止文字を適用し、禁則処理を行うものとする

※ぶら下がり処理は認める

⑤ メインタイトル「ゼンコロ推し自慢」はカラーで作成し、サイズは1段分の大きさとする。

※事前に制作したタイトルの持ち込みも可能

⑥ サブタイトルはカラーで作成し、サイズは高さを1段分とし行数は任意とする

※スタイルは自由とする

⑦ 写真はカラーで使用

※写真の加工は、トリミング、拡大・縮小のみ可能とする(補正は不可)。ただし写真の扱いは全て3mmの角丸矩形にすること

2025年度ゼンコロ版アビリンピック DTP組版競技アンケート集計

1. 競技参加者	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん	Hさん	Iさん	Jさん
① 競技課題について? a. 難しかった b. まあまあだった c. 簡単だった	b	a	b	b	b	b	a	a	b	a
② 競技時間は? a. 短かった b. ちょうどよかった c. 長すぎた	a	a	b	a	a	a	a	a	a	b
③ 次回やるとしたら? a. ぜひ参加したい b. 別の人が参加してほしい c. 参加したくない	b	a	a	b	a	b	a	b	a	c
2. 付添者										
④ 競技課題について? a. 難しかった b. まあまあだった c. 簡単だった	b	b	b	b	b	b	b	b	a	a
⑤ 競技時間は? a. 短かった b. ちょうどよかった c. 長すぎた	b	b	b	b	b	a	a	a	a	a
⑥ 次回やるとしたら自法人より? a. ぜひ参加させたい b. 別の人が参加させたい c. 参加したくない	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a

⑦ 主催者への要望等 (参加者)

- 競技大会を開催していただきありがとうございました。本番にむけて構想を考え、素材収集をし、当日はみなさんの作品をみることができ、勉強になりました。個人的な感想なのですが、平日の午後からの開催ということもあり、緊張もあって、午前中の仕事を終えてから競技大会に参加するための、頭と気持ちの切り替えが大変と感じました。もし可能でしたら、競技開始を午前中にしていただけると、私事ですが、ソワソワする気持ちが少し落ち着くような気がします。
- 平日の就業時間内での開催だったため参加しやすかった。
- 次回の記念品には熊よけスプレーをお願いします。
- 各事業所によって違うと思いますが、仕事が忙しい時期と重なってしまったため、準備する時間がとれなかった。閑散期での開催が望ましい。
- 時間もう少しほしいです。

⑧ 主催者への要望等 (付添者)

- 開催時期の検討
- 次回も平日がよい
- 交流会で紙出した作品がパソコン越しでは見えづらかったので改善の余地があると思う。
- 平日開催を希望します。
- 前準備など各自時間の取り方にばらつきが出てしまいますが積極的かつ楽しそうに課題に向き合っていました。
- 問題の難易度、時間はちょうどよかったと思います。
- 当日の運営また前準備、テスト問題の作成などご苦労さまでした。
- 今回の課題のような10の事業所のテキストと写真を、すべて入れて編集していくことというようなポイント的な要素をひとつは盛り込んでいったらよいのではないのでしょうか。全体的にみて時間的には組版は2時間半が妥当だと思います。内容はみなさんにまんべんなく満足感のある課題が理想ですが、基本的に今回のような形をベースにしたいと思います。
- リモートでの参加だったので、参加者も気軽に参加できてよかったと思います。ただ、競技のスタートがわかりづらく、他の参加者の様子を見てから作業を始めたため、少し出遅れた部分がありました。主催の方の画面内、カメラの写る場所にストップウォッチ等があると分かりやすかったなと感じました。
- 前回のデモ大会より数段組版的の要素が上がり、上手く4ページに納めることに各参加者の苦労が見られました。課題内容と競技時間についてはある程度競技色を残す上で妥当かと思いますが、アンケートの回答内容によっては検討の余地が必要かと思います。

2025年度ゼンコロ・リーダー層職員研修会

教育研修部会

遠藤 至子

(あかつきコロニー)

年末に差し掛かろうとする12月の11日・12日に、「リーダー層職員に求められるスキル・知識を学ぶ」と題した、ゼンコロ・リーダー層職員研修会を開催しました。

昨年度のリーダー層職員研修会に引き続き参加での研修会となりましたが、今回は参加者自身が課題やテーマに取り組む機会をより多く設けられるように企画しました。

初日は講義を中心に、①障害者を取り巻く歴史を振り返り、昨今の状況について学びを深めることを目的とした「障害者の自立と人権」（講師：中村会長）について、②実践としての支援力の向上に必要な知識やスキルを学ぶことを目的とした「支援に求められる職員のスキル・視点とメンタルケア」（講師：井上委員）について学習しました。

「障害者の自立と人権」では、「障害者運動の継承」と題して、障害者福祉の歴史をゼンコロの活動と共に振り返りながら、障害者権利条約の意義や現状の課題の考察、権利獲得のための運動についてお話がありました。今ある権利は上から降ってきたのではなく先人の方々が声を上げ続けてきた結果であり、道半ばである平等社会の実現のため私達ができる

ことは何かを参加者に問いかけてくる内容でした。

「支援に求められる職員のスキル・視点とメンタルケア」の講演は、日々の対応に苦慮しているケースに対して支援側の考え方や言動を改めて振り返る機会となり、新しい視点を持つためのヒントが沢山盛り込まれていました。感情労働とも言われている福祉の現場ですが、自身のメンタルが健やかであることがより良い支援に繋がるということ、そのためにできること・取り組むことや、万が一休職した場合のリワーク時のポイントについても触れられた内容でした。

2日目は、初日の講義で学んだ内容について見識や理解を更に深め多様な気付きを得ていくことを狙いとして、個別ワークとグループワークを中心に、より良い職場作りについて考える場としました。こうした参加型のワークは自身の考えをまとめる過程、様々な人の意見をチームとしてまとめていく過程そのものも学びになったと思います。更に、私達の日々の実践とこれを取り巻く障害者福祉の状況についてより広い視野で捉えられるよう、国際社会における障害福祉についてのミニ講座を実施しました。(2日目講師：鈴木常務)

また、研修会の本線からは外れますが、研修会初日の終了後に行われた意見交換会では、それぞれの法人・地域の情報交換や、研修に対する質問、相談、意見交換等が行われ大いに盛り上がりました。日中の改まった場での研修会とはまた異なり、ざっくばらんに話し合える場だからこそ得られる学びもあります。この場でお互いの交流も深めることができたのではないのでしょうか。

参加者からは「広い視野で日々の業務を行っていききたいと思った」「今ある権利は運動によって勝ち取ってきた歴史を知った」「無関心でいることの罪、声を上げ続けることの大切さについて学んだ」「支援員としての向き合い方(同じ土俵に立たない)や考え方(科学的分析)、視点(誰の視点に立っているか)について気付かされた」「職員育成には部下に相談して考えてもらう事が一番大切だと思った」「国によって障害福祉の取り組みに大きな違いがあることを知った」「グループワークでは、様々な地域の様々な立場の人達の話聞くことができ新しい視点を持つことができた」等々の感想をいただきました。

日常の業務が忙しい中で2日間研修に充てるのはなかなか大変だったと思います。せっかくの貴重な時間を有意義に過ごせた実感してもらえたのであれば幸いです。

ゼンコロ・リーダー層職員研修会に参加して

青森コロニー 大坂 弘

令和7年12月11日からの2日間、東京都中野区で開催されたゼンコロ・リーダー層職員会に参加しました。開催にあたり準備や運営に尽力された運営委員会、事務局の皆様改めて感謝申し上げます。

研修の3日前には青森県東方沖地震が発生し、八戸市を中心に大きな揺れがありました。幸いにも当協会に大きな被害はありませんでした。そのような中、研修当日の挨拶の場では現地の状況を気にかけて、多くの方から温かな気遣いの言葉をいただきました。初めて顔を合わせる方ばかりでしたが、仲間(コロニー)であると感じられる場面にとっても嬉しく思いました。

研修ではコロニーの歩んできた歴史や、これまで大切に受け継がれてきた理念について学ぶ機会がありました。社会の変化とともに築かれてきた考え方を振り返る中で、特に印象に残ったのが「共に働く」という言葉です。この言葉はコロニーの理念でもあり、私自身も日頃の仕事のうち、事業所の説明や案内をする場面などで自然と使ってきた親しみのある表現なのですが、研修を通してその背景にある歴史を知ることで、これまで以上に深い意味を持つ言葉として受け止めるようになりました。「共に働く」とは、障がいのある無で分けることなく、一人ひとりの違

いを認め合いながら同じ社会の中で役割を持ち、それぞれの力をいかしていくことなのだと思われました。それは特別な考え方ではなく、誰もが安心して働き暮らしていただける社会を願う、世界共通の思いであると学びました。日々の中で続けてきた取り組みがその理念と繋がっていることを知り、これまで以上に深みを増す言葉となりました。あわせて、人権について学ぶ時間もありませんでした。人権とは難しい言葉や考え方ではなく「自分がされて嫌なことは人にもしない」という、とても身近な視点から始まるのだと聞き、改めて確認することができました。そして実際の現場においては、自分自身の基準だけで判断するのではなく「人によって考え方や受け取り方は異なる」という多様性を前提に置くことが大事であると気づく場面も多く感じるがあります。自分では良かれと思っただけに行っていることが、相手にとっては同じように感じてもらえないとは限らないという視点は、日々の関わりを振り返る上で心に留めておきたいと思えました。

大きな気づきとなったのは講師の方からいただいた助言です。私自身これまでの経験から「こうあるべきだ」という一つの正解を求めすぎて、知らず知らずのうちに自分の型にはめて物事を進めてしまっているところがありました。しかし、講師の方から「型にハマらなくていい」という言葉と具体例をいただいたことで、自分の考え方や視野を狭めてしまっていたことに気づくことができました。決まっ

た枠組みにとらわれず、少し違う角度から柔軟な視点をもって向き合うことが、支援の幅や仕事の可能性を大きく広げていけることと学び、今後の実践において大切にしていきたいと考えています。グループワークでは参加者それぞれの考えや感じ方を共有する時間がありました。地域や立場が違っても大切にしている思いは共通する部分が多く、自分一人では気づけなかった視点に触れることができ、こうした対話の時間も大変貴重な学びとなりました。

今回の研修を通して、これまでの取り組みを大事にしなが、時代の変化に合わせて考え方を少しずつ広げていくことの必要性を改めて感じました。大きな変化を求めるのではなく、まずは日々の中のできる小さな気づきや工夫を重ねていくことが、より良い働く場につながっていくのだと思います。研修で得たことを心に留めながら、これからも「共に働く」という深みのある言葉を大切に、一人ひとりが無理なく役割を持てる場を目指していきたいと感じています。このような学びの機会をいただきありがとうございます。

ました。初日には、これまでの障がい者による人権運動や、それに関わる制度の成り立ちについての講義を受け、そこでは本来誰もが持つ権利が、障害を理由に軽視されてきた過去や、その権利を勝ち取るために行われてきた様々な運動、そして現在も続く取り組みについて改めて学ぶ貴重な機会となりました。

今回、初めて2日間にわたりゼンコロリーダー層職員研修に参加させてもらい

リーダー層研修会に参加して
山形県コロニー協会
山川 龍矢

支援に求められるスキルと視点の講義の中では、陥ってしまいがちなケースで「利用者と同じ土俵に立たないこと」について考えさせられました。これまで、利用者や支援者の中で、できる限り寄り添おうとしてきたつもりでしたが、実際には支援者としての立場を忘れ、同じ立場で受け答えをしようとする傾向があったと気づきました。日々の支援の中で反省すべき点があると痛感し、今後はより注意を払いながら支援を行っていきたくと思

っています。また、障害を持つ方々を支援する際には、その方がなぜそのような行動を取るのか、その背景や状況を深く理解することで、原因を探り、根本的な問題解決や支援の方向性を見出し、より適切なコミュニケーションの取り方を見つけていきたいと思います。

利用者本人やその家族の高齢化については、その利用者からこれらはどういった支援や制度が利用できるのかを検討し、勉強をしていく必要があると思えました。制度的には65歳から福祉保健でなく介護保険に移行してしまう問題などあり、必要なサービスが受けられなくなることに



を行う中で、日々の業務において同じような悩みや課題を抱えていることを知ることでできただけでなく、それぞれの事業所で経験してきた様々な取り組みや体験談、利用者支援における独自の工夫や解決策について伺うことができました。また、逆に滞欧に迷うような場面について「このような状態のときにはどのような対応をしているのか」といった具体的な質問を投げかけ合い、お互いの考えや視点を共有することができた点も非常に有意義でした。こうした活発な意見交換を通じて、多くの学びや気づきを得ることができた、充実した2日間だったと感じています。今後も、今回の研修のような分け隔てなく意見を交わし、お互いに学び合える研修や交流の場があれば、ぜひ積極的に参加していきたい思います。

『ゼンコロ・リーダー層職員研修会に参加して』

ながのコロニー 長野福祉工場
有澤 拓弥

本研修を通じて、業務の理解を深めるとともに、自身の課題意識を明確化することが出来ました。本稿では特に印象に残った学びと活用方法を記します。

1. 障害者の自立と人権

① 自立・個人が自己決定を尊重され、生活の選択肢を持ち、社会参加を通じて自己実現を図る状態。経済的自立だけでなく、生活の自由度・社会的法包括が含まれます。

② 人権・障害の有無に関係なく、全ての人が平等に人権を享有する原則。障害者権利条約（CRPD）などを通じて、法的保護と政策の指針が整備されています。

③ 社会モデルと医学モデル・社会モデルとは障害は個人の問題ではなく社会のバリア（環境・制度・偏見）に起因すると捉え、治療や修正を重視します。

④ 国際的枠組み・国際連合障害者権利条約（CRPD）に基づき、障害者の人権と基本的自由の全面的な保護・促進・実現を目指す。締約国は法制度・社会サービス・雇用・教育・政治参加などの分野でバリアフリー化を推進する義務があります。また、アフターマティプ・アクセス（障壁の除去・機会の平等・

意思決定支援）を強調しています。

⑤ 日本の状況・障害者総合支援法、障害者権利条約の受容・国内整備、障害者雇用促進法などが組み合わさり、福祉サービスの提供と就労支援、地域生活支援が進められています。また、人権侵害の防止・相談窓口の整備、意思決定支援や地域包括ケアと生活支援の強化、バリアフリー対応を継続的に推進しています。

2. 支援に求められる職員のスキル・視点とメンタルケア

① アセスメント力・個人のニーズ・希望・環境を総合的に把握し、継続的に状況を評価する力が必要です。

② 自己決定支援力・当事者の意思を最優先に尊重し、選択肢を提示して支える能力が必要です。

③ コミュニケーション能力・代替手段を活用した分かりやすい伝達と傾聴、共感、非暴力対話の実践をしていきます。

④ 倫理・機微への配慮・プライバシー保護・人権尊重・偏見排除、バランス判断が必要です。

⑤ 連携・調整力・他職種・家族・地域資源と協働し、支援計画を実行する力が重要です。

⑥ 尊厳と共感・決めつけずに「アクティブリスニング」を徹底していきます。

⑦ 自己決定の尊重・当事者のペースと希望を尊重し、選択肢を提示して選んでもらいます。

⑧ 安全と信頼の関係性・安心して語れる

環境づくりを実践してきます。

⑨ 一貫したサポート網・医療・福祉・教育・地域資源を連携させ、継続的なケアを確保していきます。

3. 個別ワーク、グループワーク、ミニ講座「国際視点からの気付き」

① 個別ワークとグループワーク・1日目の振り返りを個別ワークでは行い、グループワークでは2つのテーマで行いました。

・「すべての障害のある方のデイサービスワークを保証する職場とは？」…社会の実態として利便性を求めた結果、バリアフリー対応できていないところや少数意見の方たちが置いて行かれていく現状があり、不平等につながっている部分があります。現状を見直しながら、違いを受け入れながらそのことについての発信をしていくこと、考え続ける過程を大切にしていかなければいけないことなどの意見がありました。

・「私たち抜きに、私たちのことを決めないでから考える、障害者が求める人権尊重とは？」…現状の課題として、決めつけや先入観で選択肢を本人の意思とは関係なく決めてしまっている部分があります。また、交通手段も不便なところがあり、課題になっています。そして、仕事でも一度、本人がやってみたいことをやってみて、一緒に考えていくことが必要という意見がありました。

② ミニ講座「国際視点からの気付き」

個別ニーズに応じた配慮が制度の中核だが、企業での実務運用は現場レベルの判断とリソース配分に依存しています。SDGsとの接続について2030アジェンダ下で、障害者の包摂が持続可能な社会の不可欠な要素です。この流れを一時のものとして継続していくことが大切です。

4. まとめ

この研修会に参加して、それぞれの意見を交換することができました。私が一番心掛けていきたいことは客観的にコミュニケーションを取りながら、相手に伝わりやすいように関わっていくことと決めつけずに考え続けることを心掛け、取り組んでいきたいと思えます。

リーダー層職員研修会

東京コロニー 東京都葛飾福祉工場
藤村 悠一郎

先日、初めてリーダー層職員研修会に参加させていただきました。普段の業務では防災用品や縫製加工品の営業を主にしている為、今回の研修で初めてに近い状況で福祉について詳しく学ぶことができたと感じました。中村会長のお話では、これまでの障害者運動の歴史からこれからの展開にいたるまで、そして取り組むこと、問われることを拝聴し、少しでも継承できたのではないかと思います。障害を理由としたあらゆる差別のない社会

を目指す中で、ひとつの持つべき考え方として、本人がもっている機能障害は個別にもっている個性でしかないということや、「私たちが抜きに、私たちのことを決めないで」という障害者権利条約の理念にもなったこのスローガンは、自分のことをひとが決めるのは嫌だ、自分で決めたいというごく当たり前の思いでしかないということ等が学んだ中でも心に残っています。それでも知らないことや前提となる福祉についての基本的な学びも圧倒的に足りておらず、これからを担う為にはもっと多くのことを勉強しなければならぬと痛感した次第です。

運営委員の井上さんのお話もまた、障害者支援に求められる私たち職員の具体的なスキルであったり、数多くの現場目線で少しずつ練り上げられていった持つべき視点を惜しみなくお話しくださり、大変興味深く聞かせていただきました。次々と生まれる障害者福祉サービスを使った新たなビジネスモデルの聞や、メンタルケアやストレスコーピング、リワークプログラムについてや人材育成について等、支援の現場に必要な、貴重なお話が事例に基づかれてわかりやすく、常に色んな想定をしながら支援業務をしている支援員の核となるものを教えてもらえたような気がしております。

最終日の鈴木常務のお話は、まさに国際社会における障害者福祉の今を知ることができました。各国でも障害者福祉は様々なやり方で、考え方で行われていますが、とりわけ日本の福祉についての考

え方や制度は世界に比べても進んでいるところが多いと感じました。それは初日に中村会長のお話であった、先人たちの活動によるところが多いのだと思います。それでも障害者権利条約に基づいて改善勧告されてしまっているところや、他国に学ぶところもあるし、これからが本場に障害者福祉施策を、障害のある当事者が社会の対等な一員として安心して暮らすことのできるものとしていかななくてはならない、その一助となれるように、自分自身を少しでも福祉に携わるものとして、知識と実行力をつけていきたいと思いました。

このリーダー層職員研修では、講師の御三方の貴重なお話を拝聴する機会に加え、グループワーク等でほかのコロニーの事業所の方たちと話をする機会もいただきました。それぞれの業務を背負っている皆さんのそれぞれの立場から発せられる意見にはたくさんの気づきがありましたし、深く考えさせられることも多かったです。グループワークでは私が発表する係でしたが、話し合いの中で出てきた意見をただまとめていうだけで済みませんでした。日々の業務のなかで普段から意見や考えがあるので、こういう場でもそれがそのまま出せるのだと思いました。私自身ももっと業務に関することを福祉の視点から見たいと思うように、それが自然にできるようなりたいと思います。2日間の研修で学んだことをそれだけで終わらせず、自分自身の視野を広げて色んな業務につなげていきたいと思えます。講師

の方、運営委員会の方、参加者の皆様、本当にありがとうございました。



リーダー層職員研修会に参加して
あかつきコロニー相談支援センター
増淵 明美

「リーダー層研修会」という案内を頂いたとき、正直に申し上げますと、私は少し戸惑いました。役職のない、現場のいち計画相談員である私に、リーダーたちの集う場所まで何ができるのだろうか。そんな少しの場違い感と、少しの緊張を抱えながら、研修に参加しました。しかし、2日間の研修を終えた今、少し自身の成長を感じる事が出ています。それは、難しい理論を学んでだからで

はなく、支援者としての「心の置き場」を再発見する事が出来たからです。

研修の冒頭で触れた、障害福祉の歴史と「ゼンコのあゆみ」。ここ数年で目まぐるしく変わる制度の裏側に、「祈り」と「闘い」の歴史があったのかと驚きました。

今、私たちが当たり前のように利用者様と向き合い、サービスを組み立てられているのは、かつての過酷な時代に「このままではいけない」と立ち上がった先人たちがいたからです。彼らが泥をかき分け、道なき道を切り拓いてくれたからこそ、今の私たちの「日常」があります。

この歴史を知る事は、単にお勉強ではなく、先人たちが大切に守り抜いてきた「魔法のバトン」を受け取るような儀式のような感覚を感じました。このバトンをしっかりと握りしめ、次の世代へ、そして未来へと繋いでいく事。それが、今の私に出来る最初で最大の「恩返し」なのだと思いました。

今回の研修で、私の心に最も深く刺さったのは「支援に求められる視点」についての再確認でした。

計画相談員として多くのケースに関わっていると、つい知ったような顔をして「このケースは対応が困難なんです」と言ってしまう事があります。でも、研修のなかでハッとさせられました。「それは、支援員にとって『対応が難しい(困難)』というだけで、利用者様自身の『困難』ではないのではないか?」という問いです。

この言葉に、私は自身の傲慢さを突き

付けられたような気がしました。私たちが「困ったなあ」と頭を抱えていたのは、実は自分の力量不足や、思い通りにいかないことへの不満に過ぎなかったのかも知れません。

利用者様にとっての困難は、自分の気持ちが伝わらないもどかしさや、世界が少しだけ生きにくい形をしていることです。支援の主語を「私」から「利用者様」に入れ替えた瞬間、今までの「問題行動」と見えていたものが、本人の切実な「SOS」のメッセージに変わって見えしました。この「視点のメガネ」をかけ替えることこそが、私たちが磨くべき最高のスキルなのだと、深く、深く、実感しました。

また、今回のグループワークは私にとっても新鮮で楽しい体験でした。普段は都内での研修が多く、どうしても視野が狭くなりがちですが、今回は全国から、そして多職種の方々が集まっていました。

全く異なる視点からのアドバイスや意見。それらは、凝り固まった私の頭をほぐしてくれ「そんな考え方もあるのか!」「その悩み、わかります」と共感し、真剣に語り合う時間は、私にとって心地よい刺激に満ちていました。

私は現在、リーダーという役割には就いていません。でも、本研修を通じて「リーダーシップ」とは、肩書きのことではなく、その人の「生き方」「支援への姿勢」のことなのだ学びました。

明日からの計画相談。私はまず、目の前の利用者様に、今までよりほんの少し

だけ大きな耳と、優しい目を持って向き合おうと思います。「あなたの困難は、私にとっても大切な宝物です」という気持ちを込めて。

この素晴らしい研修の機会を頂いた事に感謝し、今日からの日々を一步ずつ、丁寧に歩んでまいります。本当にありがとうございました。

リーダー層研修会に参加して

沖縄「ローニー」 沖縄「ローニーセンター」
神谷 健徳

本研修を通じて、障害者権利条約の歴史的背景、当事者たちが勝ち取ってきた権利の重み、支援者としての在り方まで多角的に学ぶことができました。また、設備の不備を人の温かさで補う海外の事例は、「合理的配慮」という言葉に頼りがちな日本の支援体制に一石を投じるものでした。特に井上忠幸講師の「アンガーマネジメントは不要。同じ土俵に立たないことで解決する」近すぎる距離感が「支援」を「対峙」に変えてしまうという指摘は、深い感銘を受けました。また、支援する上での悩み事や困り事等の事前アンケートに対し、参加者全員に回答をくださった真摯な対応には深く胸を打たれました。このような学びの多い研修を設けてくださったゼンコ運営の皆様へ感謝致します。ありがとうございました。



南から 北から



セルプステーション青森では、昨年度末から日本財団様からの助成を受けデジタル化事業に向けての整備を行いました。作業場の確保や機材のレイアウト、書庫の位置など広範囲にわたる準備が必要となり、様々な方の協力により整備が進んでいきました。整備の行われているなか、国立国会図書館（NDL）のデジタル化事業に参加するため、コロニー東村山での実地研修に参加し知識を得ました。雪深い青森へ戻っ

青森

デジタル化事業への挑戦

青森県コロニー協会
セルプステーション青森
中谷 則雄

いた時にはまだ整備が整っておりませんでした。徐々に暗室・スキャナ・PCが整備されこれから始まる本番に向けて期待と不安の入り混じる心境を抱えておりました。スキャナが整備されると同時に課員全員、初めて触る機械に戸惑いながらも冊子のスキャンの練習を行いました。

いざ始めると、わからない部分が多く、解決策を模索しているうちに日々が過ぎていきました。リーダー拠点や先輩拠点からの助言をいただき体制を整えていくことができました。利用者も徐々に増えてきましたが、教えながらの作業となり計画通りには進まず苦戦いたしました。しかし、青森コロニー全施設で成功させようと、各施設から



の応援により計画に合わせる事が出来ました。とても感謝しております。また、利用者さんの中でも作業に慣れ相当数のコマを稼げる人も出てきました。今後は、作業出来る利用者さんを積極的に増やしていければと思います。

この原稿を作成している段階で、最終納品まで残り約1か月という所まで来ております。まだまだ先輩拠点には及びませんが、日本財団チームの一点として目標を達成していきます。

山形

就労選択支援事業を開始しました

山形コロニー
就労サポートセンター
大沼久美

山形コロニー就労サポートセンターでは、令和7年10月より「就労選択支援事業」を新たにスタートしました。当センターは、平成18年に就労移行支援事業を開設して以来、これまで延べ329名の方の就労を支援してきました。その中には、就労継続支援B型の利用を見据えながら、就労移行支援でのアセスメントを活用してきた方が145名おり、こうした長年の積み重ねが、当センターの支援の土台となっています。

これまでに培ってきた経験やアセ



グループでのボールペンの分解・組立作業
「作業遂行」や「コミュニケーション力」などを確認する

メントのノウハウを生かしながら始まった就労選択支援事業には、すでに15名の方が利用されています。当地域において、就労選択支援の支給決定期間は1カ月とされています。ワークショップによる作業課題を用いた評価を中心に行い、「一人ひとりの『できること』や『取り組みやすさ』を丁寧に確認しています。また、希望に応じて、就労移行支援で日頃から連携している一般企業の協力を得て、実際の職場で作業を体験する機会も設けています。事業所の中だけでなく、事業所内外の多様な就労体験を用意できる点は当センターならではの長特であり、地域においても他に例のない取り組みです。

日々の活動は、J E E D が開発した就労アセスメント表を活用し、作業の進め方や職場での過ごし方、人との関わり方といった視点から整理・記録を行っています。記入には時間がかかりますが、その分、利用者自身が振り返りを行いやすく、結果を分かりやすく伝えることができます。作業を通して自己評価を行い、「自分の強み」や「工夫が必要な点」に気づいていく過程も、大切にしています。

支援の総括としては、本人を中心に、家族や学校、相談支援事業所などの関係者が集まり、これまでの取り組みを振り返る場を設けます。アセスメントの結果を丁寧に伝えながら、本人の思いや希望を確認し、今後の進路や働き方について一緒に考えていきます。納得感をもって次の一步を選べるよう支援することが、この事業の大きな目的です。利用者からは、「自分のことが整理できた」「これまで考えていなかった働き方にも目を向けられるようになった」といった声が聞かれています。

今後も、実際の体験を通して「自分で選ぶ」プロセスを大切にしながら、地域の皆さんと力を合わせ、一人ひとりに合った働き方に向けた支援を進めていきたいと考えています。

ながの

『ワークフェス』について

ながのコロナー
ワークサポート篠ノ井
小室 和平

ワークサポート篠ノ井では入所および通所合わせて58名の利用者の皆さんが、日々競馬のゼッケン作製やお土産用菓子の箱折りや箱詰めなどの生産活動に取り組んでいます。生産活動以外にも、より多くの皆さんに楽しんでいただけるように工夫をしながら2ヶ月に1回程度行事を実施しています。

新型コロナウイルス感染症流行以降、利用者の皆さんを取り巻く状況は大きく変化しました。入所施設として



は世間と同じスピードで警戒を緩めていくことが難しく、とりわけ地域との交流の機会も減っている状況です。以前まで毎年開催していた地域の方を招いてのお祭りもしばらく実施できていませんでした。利用者の皆さんからの根強い希望もあり、2025年11月22日に6年ぶりとなる『ワークフェス』を開催しました。

検討段階では感染予防、利用者の皆さんの身体状況やニーズの多様化など多くの課題がありました。安全により多くの皆さんに楽しんでいただくこと、社会福祉法人として重要な役割である地域貢献をテーマに企画を検討していただきました。利用者の皆さんへの当日の支援との両立や感染予防の観点から来場していただく方を制限させていただきました。地域の子育て支援と小学校のお子さんとそのご家族をお招きすることにしました。

当日は天候に恵まれ、お祭り日和となりました。想定よりも多くの利用者の皆さん、利用者のご家族、保育園と小学校のお子さん、お子さんご家族にご来場いただき、200名を超える方々にご参加いただきました。

保育園と小学校のお子さんにはステージで合唱を披露していただきました。日頃の練習の様子も浮かぶような素敵なハーモニーに、多くの方が聞き



入っていました。発表後はお子さん向けの屋台でお菓子釣りを行いました。利用者の皆さんにも店先に立っていただき、久しぶりに地域の方と交流をもつことができました。また3台のキッチンカーに来ていただき、おにぎり・ホットスナック・クレープなどの販売もしました。利用者の皆さんにとっては食べたい物を自分で購入して食べるという機会になり、とてもご好評をいただきました。地域の方にも想定を大きく超えるご購入をいただきました。久しぶりの開催ということもあり課題も残りましたが、多くの皆さんに楽しんでいただけたのではないかと思います。今後も生産活動の支援を充実させながらも、『ワークフェス』を含

めて、より多くの皆さんのニーズに応えたいと思います。

東京 低カリウム野菜の栽培 に成功しました。

東京コロニー
コロニーもみじやま支援センター
井上 忠幸

コロニーもみじやま支援センターが2018年に立ち上がり、その際に水耕栽培室を設置しました。すでに葛飾福祉工場ではこの倍くらいの規模での水耕栽培室ができていたところではありますが、もみじやまでは規模も小さいことから、通常の水耕栽培だけでなく様々な付加価値を検討していました。その中の一つが低カリウム野菜となります。

水耕栽培を定着させることもなかなか難しいところでもあり、さらに植物が育つ必須養分とされるカリウムの含有量を下げることについては、本事業所立ち上げ前に、すでに成功している事業者聞いてみたりはしましたが、まずは通常の水耕栽培が安定してできるようにならなければ低カリウムに手を出すべきではないというのがおおよその意見でした。

事業開始から6年を経て水耕栽培も

安定したと判断し、改めて水耕栽培の可能性を探していたところ、秋田大学の小川先生との縁がございまして、いろいろとお話を聞くことができ、もしかしらだできるのではないかという思いが出てきました。その後何回か小川先生と現場スタッフを交えてミーティングを重ね、基本的な考え方や仕組み、そして薬剤に至るまでご指導いただきました。ようやくできた最初の一株には何とも言えない思いがありました。現場の苦労はさらなるものだったことと思います。

その後、成分検査を何度か経たのち、ようやく低カリウム野菜としてのレベルを張ることができたレベルになりました。やっとできてきたねというもつかの間、次には賞味期限の問題が待っていました。包装材料を変更するなど創意工夫でこちらもようやく出荷できるところまでこぎつけたという感じです。

この間では、事業所がある中野区におきましては、なかのSDGs パー



トナーとして登録する仕組みがあります。東京コロニーは登録事業者でもありますので、これを通して区内の企業の皆さんにもプレゼンを行い、低カリウム野菜の成功とともに、カリウム制限がある方へのサラダの提供などをもみじやままでできるようになったことをお知らせしました。

大変技術力も必要なことから、後は栽培方法なども随時マニュアル化しながら、障害がある方たちの作業として展開できるように努めていくとともに、徐々に低カリウム野菜の普及につなげていくこととしています。

あかつき

地鎮祭

あかつきコロニー
高橋 毅

あかつきコロニーは現在、施設の建替え工事中です。同じ敷地に建替えるので、工事の間は別の場所の仮設施設に分散して事業を続けています。昨年6月から解体工事が始まり11月中旬に平地になりました。解体工事だけで6ヶ月ほど費やしましたが、旧建物は古いとはいえコンクリートの塊でしたので、多くのガラが発生し、その処理の受け入れがはかどらず、時間が掛かった経緯があります。現在東京近郊

は再開発が多方面で進んでおり、ガラの処理が追いついていかない状況が重なった影響です。

12月から新築工事に移行しましたが、平地の期間が少しありましたので、11月19日に地鎮祭を行いました。近年では地鎮祭を行うことも少なくなりましたが、当法人でも当初は地鎮祭を行う予定はありませんでしたが、職員からの強い希望もあり実施を決めた次第です。

地鎮祭には、その土地を守る神様に建築の許可を頂き、工事の安全と、建屋の完成後も長くこの地で安心して暮らせる様お願いする意味があります。今回は、長年印刷を発注頂いている地元神社に依頼し、地鎮祭を執り行って



頂きました。この地にあかつきコロナーが建ってから51年経ちましたが、その間、大きな事故もなく、無事に過ごすことができたのも土地の神様のお陰だったのかもしれない。これまでの感謝と共に神様には改めて今後数十年の安寧をお願いした次第です。

仮設施設に分散しているため、全員参加することはできませんでしたが、工事現場に最も近い第二作業所に移転した利用者・職員と工事関係者が参列して祈願しました。

厳かな雰囲気の中、肅々と神事は進んでいきました。途中で集中できなくなったたり落ち着かなくなってしまうたりしないかと心配もありましたが、皆、神妙な面持ちで神事を見守り最後まで参加しました。地鎮祭に参加する機会など普段の生活ではそうそう無いと思いますので貴重な体験だったのではないかと思います。

建替え工事は今年7月末ごろ竣工予定です。仮設での生活もやっと半分を過ぎたあたりで、暫くは不自由な状態が続きますが、新しい建物での出発は非常に嬉しいことであり、それを心待ちにして頑張っていきたいと思えます。

山口

親睦ポッチャ大会

山口県コロナー協会
ワークシヨップ・山口
益富 邦江

「一緒にポッチャの練習をしてみませんか？」とお声掛けいただいたことをきっかけに、当協会に他施設の方をお招きしてポッチャレクリエーションを開催しました。

毎年、山口県障害者交流ポッチャ大会の前に練習を兼ねて所内でポッチャレクリエーションを行っているのですが、他施設の方と合同で練習をするのは当協会にとっては初の試みとなりました。

外部の方をお招きするということがいつも以上に念入りに準備を進め、当日は利用者の方々と職員の方、合わせて10名程度の方が当協会にお越しくださいました。合計10チームを5チームずつの2グループに分けてそれぞれ総当たりのリーグ戦を行い、各グループの1位同士で決勝戦を行って優勝チームを決めます。本来は複数エンド繰り返して合計得点で勝敗を決めますが、今回は時間の関係で1試合1エンドで試合を行いました。所内の利用者さん同士で練習をするいつものポッチャレクリエーションのときは違い、本番さながらの緊張感で試合に臨



まれ、応援にも自然といつも以上に力が入ります。最後の決勝戦は他施設チーム対コロナーチームの戦いとなり、プレーヤーも応援も大盛り上がりでした。

ポッチャは障害の有無にかかわらず老若男女が一緒に楽しめるパラスポーツ、作戦次第で結果が大逆転することもある競技です。チームの人数が足り

ないときには職員もチームに加わって一緒に汗を流し、ポツチャを楽しみました。こうして利用者さんと職員と一緒に楽しくレクリエーションを今後、増やしていきたいと思えます。

初めて他施設の方を当協会に迎えて合同でレクを行うということで皆さんの反応が気になるところでしたが、喜んでいただけただけようでした。安心して全員でポツチャを楽しもうちに緊張も解け、最後の記念撮影の際には皆さんとても良い笑顔をされていました。

施設外の方と交流を持つことは社会性や協調性を高めることになり、ポツチャのような競技を行うことでチームプレイの楽しさを実感し、利用者の皆さんの心身のリフレッシュにも繋がります。今後、フライングディスクなど他の競技やレクリエーションでも一緒にさせていただく機会がもてるのではないかと思います。

福岡

2026年初詣

福岡コロニー

なのみ工芸

白木 良祐

今年も新しい年を迎えることができました。今年(うま)年。行動力やスピード、前進を象徴する干支と言

われています。色んな事が前進する(うま)くいく事を願って初詣に行ってきました。

なのみ工芸は福津市にある宮地嶽神社へ。「何事にも打ち勝つ」という祈りが脈々と紡がれている場所であり、商売繁昌の神様として地元の人たちに親しまれています。なのみ工芸のなかま達は、それぞれの思いを願いに変えて、一生懸命神殿に手を合わせていました。お参りと神社の散策のあとは、なかまみんなが楽しみにしている宮地嶽神社の名物「松ヶ枝餅」。寒い季節に染み渡るあたたかい松ヶ枝餅に舌鼓。みんなの嬉しそうなお顔が印象的でした。そのあとは少し事業所まで遠回り。プチドライブを楽しみ、事業所へ帰りました。

なのみ里は宗像市にある宗像大社へ。日本神話に登場する日本最古の神社の一つで、2017年(平成29年)に「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の構成資産の一つとして世界文化遺産に登録された由緒正しき神社です。宗像の地は、古代から大陸と半島の政治、経済、文化の海上路であり、宗像大社は古くから海上・交通安全の神として信仰されてきました。現在では海上に限らず、あらゆる道、陸上の神として信仰を集めています。なのみ里のなかま達も、日常生活の充実、

健康と安全を祈願し、一生懸命に手を合わせていました。お参りと神社の散策が終わり、事業所へ。楽しい外出行事の帰りの道中、スヤスヤと居眠りするなかまも……。久しぶりの外出行事をみんな楽しんでむことが出来ました。あれっ？なのみ里のなかまにはお餅はないの？と思われた方。安心してください。おやつ時間に「どら焼き」をみんなで食べましたよ。みんな、おいしそうに食べていました。

今年もなかまが元気で楽しく、仕事や日常生活が送れるように、精一杯頑張りたいと思います。冒頭でも申しましたが、今年(うま)年。すべて(うま)くいく事を信じて、なかまと一緒に一年を駆け抜けたいと思います。



佐賀

所内作品展

佐賀春光園 希望の家
サービス管理責任者
松永 悠樹

希望の家で行われている所内作品展(以下、本展)は、利用者と職員、職員の家族が日々の活動や趣味の中で制作した作品を持ち寄り、互いの表現に触れ合うことを目的とした取り組みです。完成度や技術の優劣を競うものではなく、制作したものを紹介し合い、鑑賞する機会をつくる場として、日常の延長で続けられています。

本展が始まったのは平成23年、東日本大震災が起こった年でした。当時は社会全体が落ち着かない状況にあり、施設内でも不安を感じる場面が少なくありませんでした。そのような中で、日々の活動を大切にし、制作したものを作品として形に残す機会を持つという思いから、この取り組みが始まったと聞いています。

展示される作品は、絵画や貼り絵、手芸、編み物、折り紙、習字などさまざまです。表現方法も一人ひとり異なり、普段の活動の延長として制作された作品が多く並びます。作品を通して、その人がどのような作業に取り組んできたのかが伝わってくる点も、この作品展の特徴の一つだと感じました。



大好きな鯉のぼりを洋服に

また、本展では、作品に対して金賞・銀賞・銅賞が設けられており、展示期間を経て投票が行われます。5回連続で金賞を取られ、殿堂入りされた職員さんもいらっしゃいます。これまでは、出品した作品をきっかけに、佐賀県障害者作品展へ応募し、金賞を受賞した利用者もいました。この経験は本人にとって大きな励みとなり、周囲にとっても日常の制作活動が外部へとつながる可能性を知る機会となりました。

職員の作品として印象に残っているのは、鯉のぼりが好きな利用者のために、家庭で大切に保管されていたその利用者本人の鯉のぼりを加工し、洋服に仕立てた作品です。長年親しまれてきた鯉のぼりが新たな形で生まれ変わり、身に着けられる作品となったことで、利用者の思いを大切にされた支援と、ものを活かす工夫の両方が感じられました。

当日は、利用者と職員が同じ空間に

作品を並べ、順に見て回ります。作品について簡単に説明したり、感想を伝え合ったりする中で、普段の活動とは少し違った関わりが生まれます。そのやり取り自体が、この展示の大切な場面であると感じます。

この作品展は、特別な行事というよりも、日常の延長として行われるささやかな取り組みです。平成23年から無理のない形で続けられてきた本展は、これからも希望の家の日々の活動の一つとして、利用者と職員の表現を大切にしながら継続されていくと感じました。

熊本

デジタル事業への挑戦

熊本県コーナ協会 日通園
東郷 かおり

令和7年7月から約7か月間、デジタル事業に初めて携わることとなりました。

はじめは、ほこり取りのような簡単な作業ならさせてもらえるのではないかとこのちらの希望でしたが、スキャン作業をしてみないかとの提案をいただき、参加する事となりました。

私自身も全く未知の作業だったのに、作業の基本的な流れとスキャンの仕方を教わり、初めは2人の利用者さ

んと3人でスキャンをしながら分からないことを担当の方に聞いて覚えていくという流れでした。その後、他の利用者さんにも少しずつ練習してもらい、最終的には7人の利用者さんと交代で作業に当たりました。

スキャンの手順を教え、実際に作業をしながら注意点を伝えて進めていきましたが、1日の目標数があり、注意不足で斜めになったり、早くスキャンする事に気を取られすぎてしまうといったミスが、指導致す上で難しいところでした。

スキャンするスピードは速いけれど、ミスが多くなったり、1コマずつ丁寧にスキャンできるけれどコマ数がなかなか上がらないといったことがありました。一人一人の特性によって、どのような言葉をどのタイミングで伝えればミスなく進められるか、また、ミスがあった時に、どう進めていけば再び同じミスを起こさないかということを経験して、毎週1回打ち合わせをして、現場の担当の方や園長、作業に携わっている職員と意見を出し合い、作業の中の声掛けの仕方を工夫したり、ミスを未然に防ぐための張り紙などをし、効果がなければ違うやりかたを考えながら進めていきました。

また、1日にどれくらいできたかを

意識するために、自分の撮影したコマ数を利用者さんに書いてもらうようにしました。すると、全員が初期に比べてスピードが上がり、1日に1000コマをスキャンできるようになった利用者さんもいました。

今回のデジタル事業への参加は、指導する際のそれぞれの利用者さんへの効果的な声の掛け方を考えることや、ミスなくスムーズに進めるための対策の工夫といったことを学ぶ貴重な機会であり、やりがいのある時間だったと思っています。

沖 縄 ハロウィン祭

沖縄コロニー
コロニーワークショップ沖縄
金城 琴子

令和7年10月29日にハロウィン祭を開催しました。

今回は以前から声が上がっていた法人内の沖縄コロニーセンター、隣接している児童デイにも声をかけ交流を図ろうと目的をたて、たくさんの方の利用者が楽しめる事、いっぱいの笑顔が見たい事を目標に内容を詰めていきました。その為にもまず、屋台コーナーを充実し、全利用者が出るゲーム内容を考案。食べ物に関しては栄養士と相談の上安全面を考慮しミキ



サー食の方でも食べられるものを提案。ゲーム内容は委員会のメンバーを中心に、施設全体の飾り付けを全職員、利用者の方にもお菓子入れの袋に絵を書いたり、色を塗ったり、風船を膨らませてもらったりと協力してもらい、まつりとハロウィンの雰囲気盛大に出しました。ゲームコーナー、屋台、

駄菓子コーナー、お土産コーナー、フォトブース、飲食スペースとたくさん楽しめる企画を詰め込んで、必要な予算も認めてもらいました。

開催時間ギリギリまで準備はかかり、職員は雰囲気づくりの為、いろいろな仮装をし、いざ開催！各ゲーム担当の職員も盛り上げながら順調にスタート、駄菓子コーナーではたくさん駄菓子にワクワクした表情が見られました。屋台では、かき氷、アイス、ドーナツにたこ焼き、チュロス、枝豆と豊富な種類を調理員にも協力してもらい用意しました。だんだんと、たくさんの方が集まり始め、児童デイの子供達やセンターの方たちが喜ぶ声や、子供達のはしゃぐ姿、それを見て微笑んでいる利用者にも、もっと食べたいと戻ってくる利用者。「近くの児童デイの子供達も来てくれて、想像を遥かに超えた総勢100人が参加してくれました。ハプニングだらけでしたが、職員は臨機応変に対応し終始笑顔で取り組んでいて、「みんなすごく楽しんでいて、自分たちも楽しかった。すごく良かった」と口を揃えて言っていました。帰り際には、子供達が「楽しかった、おいしかった、また来たい、いい思い出になりました」と児童デイの職員、子供達が感謝してくれていました。利用者のみな

さんからは「何年ぶりに再会できた友達がいっぱい」「子供たちの笑顔が見られて元気が出た」「楽しかった」と喜びの声をかけてもらいました。

今回のイベントを通して、職員の結束力も強くなり、改めて職員一人一人がこの仕事のやりがいを感じられたのではないかと思います。施設全体が一つになって成功したハロウィン祭でした。みんなの力を借りて成功へ導けたというすごくいい経験ができました。



JDF 能登支援活動に参加して

JDF 能登支援活動に参加して

青森県コロニー協会
青森コロニーリハビリ
飯田 崇史

期間 令和7年7月21日(月)～

令和7年7月26日(土)まで

現在被災してから一年半で能登の状況はどうなっているのか、復興の状況はどこまで進んでいるのかを実際に自分の目で確認したく、今回初めてのJDF支援活動に参加させていただきました。

初日はオリエンテーションと支援拠点である和倉温泉周辺の視察を行いました。事前に能登全体で公費解体が80パーセントまで進んでいるという状況は聞いていたのですが、まず驚いたのは旅館・ホテルが全体の1/3ほどしか稼働しておらず、遠目から見ると外見は何ともないように見える海岸沿いの大きなホテル群は地震による亀裂等により耐久性下がっており、解体するにも重機を屋上に上げて上から順に解体してゆく従来の方法が使えないた

め、特殊な重機を使用しなければならず、解体に時間がかかっていました。そこで、作業効率を上げるため、重機を海側からも船により搬入できるような海岸沿いを埋め立てていました。海面が上昇して海水が流入し、常にポンプで汲みださないと水没してしまうホテルや、歩道も所々石畳が隆起して危険なところがあったり、まだ再開していない店もあつたりと、観光地として本格的な復旧はまだという印象を受けました。

2日目は実際に支援に入る施設や事業所、送迎用に個人宅の場所等を確認するため、輪島市と奥能登をJDFの車両にてボランティアメンバー同士、交代で運転しながら視察を行いました。



9月豪雨災害による土砂崩れの様子

した。この辺りは震災の被害が特に酷く、まだ撤去されていない建物がちらほら残っていました。まずは輪島市役所へ行きましたが、建物周辺は地面の隆起によって石畳がめくれたりひびが入っていました。その後いくつか施設や仮設住宅を回りましたが、仮設住宅は住宅が密集しており、風通しが悪く気温が連日35℃となる中、環境的に

つらいのではないかと感じました。電気・ガス・水道等はほぼすべての場所で問題なく使えるようになっていて、道路も片側交互通行の道は多くても通行止めの道は減っており、各種インフラは順調に復旧している事を実感できました。その後各種事業所訪問時には、震災の影響による職員不足や利用者の減少により事業継続が困難もしくはできない所が多々あることで、送迎サービスの減少、公共交通機関の本数の減少により通院や施設に通う事ができず、自宅で暮らすことが困難な

高齢者や障がい者もたくさんいる現状を知ることができました。

3日目以降は実際に各事業所支援や個人の送迎支援を、ボランティアメンバーそれぞれ分担して担当することとなり、私が支援を



解体作業中の和倉温泉ホテル群

行った事業所では午前中まず通所している方々への調理補助業務を行いました。毎日30名前後の食事を用意するのですが、調理担当の職員が震災前は3人いたところ2人辞めてしまい、現在は職員1人と利用者2人で現場を回っていました。その様な状況のため、以前は一般のお客さんを受け入れていましたが現在は受け入れることができず、日々の通所者の給食を提供するのがやっとという現状だそうです。調理業務が終わると午後からは通所者支援に移り、通所者が帰宅する13時～16時頃まで支援を行いました。主な業務は利用者の見守りと買い物の付き添い等でしたが、ここでもベテランの職員が辞めてしまい、入社してまだ1年未満

の職員が大半で現場を回している現状がありました。私も利用者の情報が必要とんど無い中自傷行為ある方等に対応せねばならず、試行錯誤しながらなんとか対応するといった状況でしたが、ようやく特徴を掴み、これから本格的な支援ができると感じたタイミングで残り3日間の支援期間が終わってしまい、果たして役に立つことができたのか？と痛感させられました。1週間という短い期間では、状況の把握や現状の対応で手一杯となってしまう、力不足で正直あまり役に立てた実感はありませんが、その中で感じたことは、能登の支援はインフラの復旧からマンパワー不足の対応へと次の段階へ移行しており、まだまだ支援が必要な状況である事が実感できました。私が微力ながら出来ることは何かと考えると、能登の人々の苦しみや頑張っている人々の現状を持ち帰り、共感してもらうことで、直接的だけではなく間接的にも支援できることがあるという事をみんなに伝えて復興支援に興味を持ってもらい、活動の輪を広げていく事ではないかと感じました。これからでもできる限り能登の現状を把握し、発信していければと思っています。

能登半島被災地支援活動報告書

トーコロ青葉ワークセンター
深澤 辰朗

支援期間…2025年1月19日(日)

15時半～1月25日(土) 10時

1週間被災地支援に携わらせて頂き、自分自身の大きな学びと経験になりました。現地でしか聞くことができない声や雰囲気、そして現状の様子を見ることができ、被災地支援の難しさや必要性について改めて認識しました。

倒壊した建物や整備が不足している道など、実際に見てみると当時の恐ろしさを少し感じる事ができたように思います。

私は施設への支援に携わらせて頂きましたが、支援員の不足が課題になっている現状でした。震災により能登半島から離れてしまった職員も多く、施



倒壊建物

設にはよりですが被災地支援のスタッフを合わせて運営ができていた様子も見られました。

10月から復興も大きく進みだしている様子もあり、来年にはまた変わった景色になっていくのだと思います。可能であれば再度、支援に携わらせて頂きたいと思っています。

仮設住宅に住まわれている方も多のですが、ライフラインや生活自体は定着している印象がありました。(災害生活に慣れてしまっているのかもしれないです)

1週間一緒に支援を行ったスタッフの方にも恵まれ、大変な中にも楽しさがある支援生活であり、普段関わる事がない他施設の職員とも関わる事が出来たことも良かったと思います。そして送迎業務の中で能登半島を巡り、自然の豊かさや食べ物美味しさを感じ本当に良い街であることを実感しました。1週間お世話になった和倉温泉は



山崩れ

1日の疲れを取ってくれるほど気持ちの良い温泉でした。

少しでも行きたい気持ちがある職員がいるのであれば是非、支援に行きたくて困っている人の助けになって頂きたいと思っています。

また機会があれば行かせて頂きたいと思えるような1週間でした。

JDF 能登支援に参加して

山形県コロニー協会
齋藤 利良

64クルの令和7年8月24日～30日の期間で能登半島地震支援に行きました。私は初めて被災地支援に入りましたが、他のメンバーで何度か支援に入っておられた方もいたため色々教えていただきながら取り組むことができ、心強かったです。

地震発生から1年8カ月経過した時点でも倒壊したままの状態である旅館や建物、ゆがみのある道路や信号機がとても衝撃的でした。ようやく倒壊家屋の公費解体が進んできているところや、以前は輪島朝市で栄えていた場所が更地になったなど少しずつ復旧に向けて街並みが変わっているように見えますが、東日本大震災の時と比べて復旧までに多大な時間を要しているようです。JDFの拠点がある和倉温泉



輪島市役所入口

でも解体工事の作業員が多く作業されている姿や、事業所まで向かう道中で特に山沿いは片側通行が多く、現場のトラックも多く走っていました。現地の職員から聞いて驚いたのは、震災後他市への人口流出による人口減少が目立ち、もともと6校あった小学校が1つに合併したことです。学校まで距離のある児童のためにスクールバスが巡回していました。夏休み期間だったのですが普段であれば子どもたちが遊んでいるような場所でも子ども姿はほぼなく、観光客などで多少の賑わいはありましたが、特に夕方になると静かな街並みがなんだか不思議な感じでした。

事業所支援では、輪島市にある「互一笑」で厨房支援に携わりました。震災前は調理師の職員が厨房業務を担っていたのですが、その方が震災により他市に転居し、そこからは他の職員が厨房業務をなされている状況でした。状況によっては職員間で担

当を回しながら、みなさんと協力して事業を運営されていきました。私も教えていただきながら、途中からは就Bの利用者の方も一緒に昼食を作り盛り付けをし、翌日の準備を手伝いました。厨房支援が終わったあとは生活介護の支援に入り、買い物支援への同行や利用されている方と一緒に雑巾縫いやお話をしながら時間を過ごしました。事業所で作られていた名刺香がとてもいい香りでした。

各ボランティアスタッフそれぞれ支援場所は異なりましたが、同じ方面に支援に入るスタッフは途中まで一緒に移動したため、行き帰りの道中で自分たちの支援内容の話ができ、お互いに情報交換をしながら支援に入ることができました。

現地の事業所の人材不足はとても深刻で、ある施設では正規職員の半数



視察の風景 (海沿い)

以上が被災によって家屋が倒壊し、市外に転居するために職員が退職せざるを得ない状況になったとの話を聞きました。外部から支援の手を借りず、何とか今いる職員で事業を成り立たせている事業所もあるようでした。現地に行つて思ったのはもちろん事業所の支援員不足も深刻な課題ですが、その他困っている部分として、送迎のサポートや厨房の手伝いなど、特別な資格や経験を持たなくてもできる内容の人手不足も多くあると感じました。実際に私も初めての被災地支援で、現地に行くまでは自分に何かできるのかと不安もありましたが、いざ支援に入つてみると「力になりたい」という気持ちさえあれば自分にもできることでした。

「JDFのスタッフさんが来てくれることで何とか乗り切れているんです」と現地の方が話されていたのを覚えています。ゆくゆくは外部の支援がなくても現地の事業が成り立つことが理想で、今ももちろん現地の方々はその形を目指して最大限頑張られていると思いますが、今はまだまだ外部からの支援が必要なのだろうと感じました。

昨年の24時間テレビでは能登の話がありました。最近あまりメディアで能登の現状等詳しい情報を知る機会が少なくなつたように感じます。実際にその場所に行つてみるとだいぶ心に

くるものがありました。支援の輪を広げていきたいなという思いと、私自身もまた能登に行きたいです。

JDF能登支援活動(2回目)

熊本県コロニー協会
園上 健三

■支援期間

2025年8月3日(日)から8月9日(土)の7日間。第62クールで参加。

■支援内容

事業所支援5件、移動支援1件

■活動報告

今回で2回目の支援となります。前回は2024年8月4日(日)から8月10日(土)の7日間、第13クールで参加しました。ちょうど1年経過しているため復興が進んでいることに期待を持ちつつも、2024年9月の大雨災害で復興が遅れていないか不安に思いながら現地に向かいました。

到着当日と翌日の視察では昨年とほぼ同じ場所を見学しました。地震で倒壊した建物の解体が進み更地が増えていました。寂しい雰囲気はありましたが被災による悲惨な印象はほとんど感じることができなくなっていました。

JDF能登支援に参加して(2回目)

社会福祉法人東京コロニー
東京都大田福祉工場
喜多 未来

私はJDFの能登支援活動に2回参加させていただきました。

1回目は2024年7月です。被災地で支援活動を行うのは初めてで、「自分に何ができるのか」という不安を抱えている暇もなく、障害のある方の自宅の片づけや、障害のある子どもの送迎（自宅や待ち合わせ場所⇄事業所間）を行いました。震災から半年以上が経っていました。道路沿いには倒壊した家屋が並び、輪島の朝市は火災の跡が手つかずのまま、その光景に衝撃を受けました。現地に行かなければ、復興が思うように進んでいない現状を知らないままだったと思います。無知でいた自分が恥ずかしく感じられました。



利用者さんが描いてくれた似顔絵



輪島朝市

2回目は2025年12月で、送迎と事業所支援が中心でした。私が入った事業所は2か所で、「互一笑」では利用者さんの見守りを、『やなぎだハウス』では利用者さんと一緒に作業を行いました。どちらの事業所も職員が不足しており、職員の方々自身も被災されているにもかかわらず、利用者さんのために懸命に動き回る姿に、同じ仕事に携わる者として、頭が下がる思いでした。

JDFの活動拠点である和倉温泉周辺では、旅館の解体工事がようやく始まりました。「まだ壊されていなかったのか」というのが正直な感想で、震災当時のまま残っている場所も多くありました。輪島の朝市は、市内のスーパーの一角で再開されていました。倒壊した家屋は公費解体が進み更



やなぎだ自主製品

地になっていましたが、2024年9月の豪雨被害も重なり、屋根にブルーシートがかかった家屋や、土砂崩れで山肌がむき出しになっている場所も見られました。東北（東日本大震災）では半年で更地になったと聞きました。が、能登では震災と豪雨が重なったことで、復興が進んでいるとはいえず「まだまだ」という印象を受け、複雑な気持ちになりました。

さらに、支援に入った2日間は雪でした。東京であれば交通機関が止まるほどの雪でしたが、能登の方にとっては「序の口」だそうで、私が「雪がすごいですね。大丈夫ですか？」と声をかけると、「そんなに驚くことはないよ」と笑われました。これから本格的な冬を迎える能登では、雪も復興を遅らせる要因の一つになるだろうと感じ

ました。

支援活動では多くの方々に関わり、さまざまなお話を伺いました。ご心配の聴覚障害のご兄弟の送迎支援に入った際、弟さんが倒壊した自宅付近を通りながら、「今は兄弟で仮設に住んでいる。家は潰れてしまい建て直すことはできない。お金がないから。本当は直したい。とても悲しい」と手話で話してくれました。その思いを想像すると胸が締めつけられ、「つらいですね」と答えるのが精一杯でした。それでも、手話でいろいろな話を交わす中で、「楽しかった」と笑顔を見せてくださり、少しでも心が軽くなったのなら嬉しく思いました。

私が見て知り得た能登の状況は、あくまで一部にすぎません。その限られた情報を誤解なく伝える難しさを感じながら原稿を書きましたが、少しでも皆様に届いていれば幸いです。

また、この経験を自分の中にしっかりと刻み、これからも真摯に励んでいきたいと考えています。

最後に、JDFとの調整に尽力してくださった法人本部の星部長、そして忙しい中「いつてらっしゃい！」と温かく送り出してくれた職場の皆さんに、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

◇◇ある支援現場から◇◇

「ナニカイイコト」

コロニーワークシヨップ沖繩 宮城 聡

「タンタタタタタンタタッ ンタタタタタ
ンタタッ」

——深夜の静寂に妙に映えるこの馴染みのある「バツハメヌエットト長調」。これはY氏の部屋から10分おきに鳴り響くコール音である。

今年76歳になるY氏は、以前は編み物を楽しんで、自分の世界を豊かにしていたのだが、最近では編み目が見えにくくなったり、テレビの音も聞こえづらくなったりして、ぼーっとする時間が増え始めていた。その頃から深夜にコールを押す回数が目に見えて増え始めていた。

その都度私たちは部屋に向かい、「どうしました？」と聞くのだけれど、Y氏はうつろな表情で首を傾げるだけ、時には小さく「わからない」と言っただけ、時には「まあ、本人にとってもいいことではない。だからこそ、押されずに済む方法」を考へる必要があった。

ある日の夜、「用がないときは、コールボタンを押さないでね」と伝えると、Y氏はいつになく大きく頷いた。その様子に安心しつつ介護室へ向かった：

♪「タンタタタタタンタタッ」

……鳴りました。

「えっ!!もう?まだ廊下だよ?」と思わずツツコミながら振り返ってしまった。

私たちはまた「どうすれば unnecessary コールを減らせるか」を思索する日々でした。

介護職に就いて半年ほどが経ち、食事介助、移乗、排泄交換——毎日同じ業務を流れ作業のようにならしていった中で、夜間に何度も押される「理由の見えないコール」には正直いら立ちさえおぼえはじめていた。しかし、その日のY氏のコールの理由を聞いた私は、自分を見直す良いきっかけとなった。

その夜も、いつもの様にY氏の部屋よりコールがなり、部屋へ行き「どうしました?」と声をかけたが、Y氏は曖昧な返事しかない。仕方なく私はY氏のベッドの端に腰を下ろし、テレビから流れていた西部劇をなんとなくY氏と一緒に眺めていた。

しばらくすると、Y氏が口を開きかけ何かを言おうとしているのがわかった、かすかな声だったが、確かに「伝えたい」気配があった。

「どうしたの?なんでコール押したの?」

そう問いかけると、Y氏はゆっくりと、ゆっくりとした口調で

「ナニカ イイコトガ… アルカナト オモッテ」

——一瞬、僕の中で時間が止まった。——

その言葉を聞いて、私は胸の奥で「ハッ」と息をのんだ。私は、彼らが車いすでの生活になり、思うようにならない日々の中で、望まないことに慣れ、あきらめる事になれてしまっているのだと勝手に決めつけていた。

しかし、本当にあきらめていたのは、私の勝手な気持ちの方でした。

Y氏はどんな状況になろうと、ひたすら同じ環境の中で、何か小さな変化や、喜びの種を探し続けていたのである。決して理由もなくコールを押しているわけではなかった。

彼はただ「何かいいこと」が起きることを、静かに、しかし確かに願っていたのだ。私は思う。私たちの仕事は、彼らの「ナニカ イイコト」を共に探し、共に見つけ、その喜びをわかちあうことが必要なんだと。

ニーチェは『ツアラツウストラ』の中で「神は死んだ。生に意味はなく、人はただ存在しているに過ぎない、ありのままをいかに肯定していくかだ」と語っていたが、Y氏の姿はむしろ逆で、「人はどれほど小さくとも、意味を求め生き続け、喜びを見つけ続ける事こそが有意義である」と私に教えてくれた。

そして今……

こうして文章を書いている私の背後で、

新たな「希望のコール」がなっている……。

なかまの声



ながのコロニー
ワークサポート篠ノ井

名古 康介

『私の日常』

私は、ワークサポート篠ノ井の就労継続支援B型事業所で、通所で仕事をしています。

私は下半身が不自由で車いすを使って生活をしています。ながのコロニーは建物がきれいな上に通路や廊下が広く、エレベーターもあって車いすユーザーには快適な環境です。

入所した当初は靴下を折り返す作業やキャラメルや袋詰めなどを行っていましたが、現在は箱折りを中心に作業を行っています。箱折りは、やり始めた時は難しく一人で折ることができずに支援員さんや他の利用者さんに教えてもらいながらやっていました。お陰で少しずつできるようになり、今は一人で折れる箱も増えてきました。それでもまだ苦手にしている箱があるので、なるべく数を折ってしっかり折れるようにしたいです。

るようにしたいです。

ながのコロニーでは、年に数回皆で楽しめる行事があります。例えば昼食にお店から御馳走をテイクアウトして皆で楽しく食べたりします。

最近印象に残っている行事はコロリンピックという名のミニ運動会です。新しい行事で、少し離れた大きな体育館に皆で出かけて、チームに分かれて玉入れやボール回し、それにパン食い競争などをして楽しみました。コロニーの外に出て皆で体を動かさせたことは良かったなと思いました。

私はもともと自分でスポーツをしたり、野球やサッカーなどのスポーツ観戦をしたりすることが大好きです。電動車いすサッカーというパラスポーツのチームに所属していて、毎月2〜3回、週末には練習や大会に参加しています。また、時間があるときは自宅近くの空き地で、車いすで軽い長距離走をしています。青空の下で日光を浴びるのは健康にも良いし、気分転換にもなっています。さらに障害のある人の水泳のクラブにも加入して、時々プールで泳いでいます。

これからも支援員さんや利用者の仲間とたくさん仕事をして、行事にも積極的に参加して楽しく過ごしていきたいし、余暇も充実させて生活していきたいと思っています。

お薦めの本

柚木麻子著

『BUTTER』

新潮文庫 令和2年2月1日発行

佐賀春光園／HARU施設長

坂井 幸二



ていくことに半分以上費やされています。

私たち福祉業界においても人間関係を築いて、本人の内面的な気持ちを理解するよう支援の場で強調されることが多い。様々な人間性があり実際には長く業界にいても難しさを感じている。そんなことを思いながら読んだ本です。ページ数が580ほどあり読み終えるのは大変ですが、読むことで新たな気づきがあるのではないのでしょうか。

今回この本を選んだ理由は、事前に検討したわけではなく単にイギリスで30万部世界で100万部突破となったと店頭で紹介されていたからです。世界市場となっているのはアニメだけかと認識してたが、作家は村上春樹など一部が世界的に人気という思いだった。

この本の内容は、週刊誌の女性記者が裕福な男性三人の殺害容疑で拘留されている女性をインタビューする過程を書かれたものです。当然最初は拒否されるがタイトルの「BUTTER」がキーになり関係を作っ

綱 領

現代社会には、様々な障害のある私たちの仲間が生活している。
私たちは戦後の混乱のなかから、自らが生き、働く場をつくる事業と運動を共同してすすめてきたが、障害を理由に生きる諸権利が制限され、その状況は今日もなお続いている。
私たちが願う進歩した社会とは、すべての人々の自由と尊厳が守られ、平和で人間らしい生活を送ることができる社会であり、このことは人類共通の願いである。
私たちはそうした人間尊重の理念にたち、完全参加と平等と障害者の働く権利の具体的な保障をめざし、わが国の関係制度や社会・経済・文化的諸条件の改善を図り、すべての人々が幸せに生きることができる社会の実現に向けて連帯し、積極的に行動する。

私たちの誓い

- 開拓者の心** 私たちは、試されたことのない道を自分たちの手できりひろく開拓者のところをもち続けます。
- 働く喜び** 私たちは、さまざまな困難を乗り越え、働く場やそれを支える暮らす場を創設し、働くことをつうじて積極的に社会に参加できることをめざします。
- 可能性の追求** 私たちは、ひとりひとりの多様な可能性を信じて、新しい能力を発揮する努力を続けます。
- 連帯と協力** 私たちは、お互いに協力し、励まし合い、かわることのない連帯で幸せを築くことに努めます。
- 豊かな社会** 私たちは、心を合わせて、すべての人が障害の有無に関わらず、人としての幸せを感じられる、平和で豊かな社会の実現をめざします。

2014 (平成 26) 年 11 月 21 日
一般社団法人ゼンコロ 第 67 回総会 改訂承認

編集後記

◇広報誌ゼンコロ179号をようやくお届けすることができました。

今回の内容は、Wasia マニラ会議とマニラ戦跡ツアーの2つの特集と、2回目のインド訪問記。山形コロニーで開催した喫茶サービス、スキヤナ業務とリモートで行ったDTP組版業務のゼンコロ版アビリンピックの報告を掲載しました。その他リーダー層職員研修会、JDF能登支援の様子も報告させてもらいました。それぞれの内容は本文を読んでいただけると分かりますが、力作ぞろいので、結果的に54ページという大作となりました。

年二回の発行になりますので、少し時期が遅れてしまう場合もあります。担当や参加された方の声は大変貴重で、報告内容もとてもためになります。ゼンコロ版アビリンピックの参加者の声などは、本人や付添支援者の書かれたものを読んでその情景が浮かび上がり、嬉しくなるようなものばかりです。その気持ちでゼンコロの各法人の利用者や従業員に伝わり、次は私も参加して他の法人の方とお話してみたい、とじわじわと広がっていくことが広報誌の担当者としては一番の願いです。

◇ホットな話題としては、2026年2月8日総選挙です。国会開会冒頭の解散、真冬の総選挙。雪深い地域では準備する方も投票される方も難儀だったと思います。皆さん無事投票できましたか？NHKでは「みんなの選挙」で障害のある方の選挙にかかわる様々な問題を取り上げてTVやネットで特集を継続しています。2023年には「みんなの選挙 コミュニケーションボード」(A4サイズ裏表)を作成し、障害のある方が選挙の際受けられる支援や困ったときの伝え方についてまとめたものを公表しています。サイトからダウンロードできますので是非参考にしてください。

(事務局 星)



BCP対策 先ずは安心を確保しましょう！



超大容量&長寿命ポータブル電源

Anker 767 Portable Power Station

防災用途をメインで考えている方に、お勧めです。

お問合せ先 ステラグループ株式会社 TEL: 042-525-2146
〒190-0023 東京都立川市柴崎町2-3-6

— 確かな経験と豊富な実績 —



昭和44年創業以来、北海道から沖縄まで日本各地に1000件以上に及ぶ
公立、民間の福祉・医療施設の建設を手掛けた数多くの経験と実績があり
ます。施設の創設、移転、増改築だけではなく、修繕、改修、建物の劣化・耐
震診断等どんなことでもお気軽にご相談ください。計画・申請から設計・監
理に至るまで一貫したサポートをさせていただきます。

株式会社 **新環境設計**

代表取締役 大澤昌弘

〒113-0033 東京都文京区本郷4-9-15 ADMAXビル

TEL. 03-5800-0321 FAX. 03-5800-0321

<https://www.shinkankyo.co.jp>

かんたん操作で 大切な貴重書や劣化図書などを傷めずに 高品質なデジタル化に最適！

フルカラー・フェイスアップスキャナーシステム

ScanDIVA

高品質・高信頼性の国内生産

出張スキャンに対応する優れた可搬性



アーカイブモデル/ScanDIVA SD8800A

お問い合わせ先



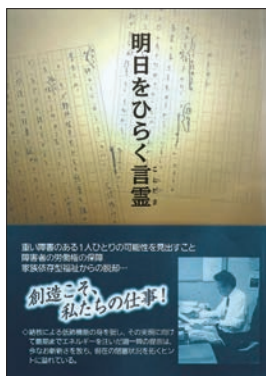
株式
会社

ムサシ

第一営業本部

東京都中央区銀座 8-20-36 TEL.03-3546-7742

URL: <https://www.musashinet.co.jp/department/info/book-scanner.html>



ことだま しらべかずおき 明日をひらく言霊 調一興 (ゼンコロ元会長) 著作選集

重い障害のある1人ひとりの可能性を見出すこと

障害者の労働権の保障

家族依存型福祉からの脱却…

創造こそ、私たちの仕事!

結核による低肺機能の身を挺し、その実現に向けて最後までエネルギーを注いだ調一興
の提言は、今なお斬新さを放ち、現在の閉塞状況をひらくヒントに溢れている。

編集: 藤井克徳・佐藤久夫・小川浩・

河村ちひろ ほか

2,500円(税込) 2011年4月15日発行